
短編集

時満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N82690

【作者名】

時満

【あらすじ】

そのまんま、短編集です。残酷表現とR15は念のためです。

無言ダンテ様主催の『創作五枚会』の企画に便乗参加した作品を中心に並べる予定です。なお、私は『創作五枚会』の正式な参加者ではありません。興味を持たれた方は是非、下のリンクから『創作五枚会』特設サイトを訪れてみて下さい。

＊第7回テーマ作品は五枚会様と足並みを揃えて、3月19日の20時にアップします。

ビアンカ（創作五枚会テーマ『人形』（前書き）

テーマ『人形』

禁則事項…主人公の「」による会話文禁止

文字数…2010

ビアンカ（創作五枚会テーマ『人形』）

???ビアンカ???

そう、私の名前はビアンカ。

一体どれくらい私は眠っていたのかしら。厳密に言うと、眠っていたのではないのだけれど。

それにしても暗いわ。明るければまぶたを透かして光を感じるけれど、全く感じない。空気の流れは感じるから、箱に仕舞われているわけでもないみたいだし、夜なのかしら？

でも、マスターは怖がりで電気を点けていないと眠れないのに。ということは、友達の家にお泊まりなのかしら。

そんなことをつらつら考えていると、だんだん右の方から光の気配を感じてきた。

ああ、多分太陽が昇ったのね。お友達の家に行ったなら、夕方までマスターは帰ってこないのね。

つまらないわ。昔は私もお泊りに連れて行ってくれたのに。いつも一緒、大好きよって、言ってくれたのに。置いて行くななんて、酷いわ。

誤解しないで。何時もはこんなこと思わないのよ？

魂が宿ったとはいえ、ただの人形が独占欲なんて身の程知らずって分かってるの。

ただ、ちょっと今日はそういう気分だけ。

……ううん、駄目よ卑屈になっちゃ。やっぱりさっきの言葉、撤回するわ。

私はただの人形じゃない。だって、魂が宿るほどマスターに愛されたんだもの。ちょっと寂しいくらい、どうっていうこと無いわ。

やがてまぶたの向こうから感じる光が、そろそろ夕方だと私に教

えるほどに時が過ぎた。

扉を開ける音がして、誰かが入って来る。私は一瞬期待したけれど、すぐに落胆した。この気配はマスターのじゃない。マスターのお母さんと、それから知らない人の気配。

私は苛立った。

マスターは誰かが自分の部屋に入るのを嫌がる。お母さんだって例外じゃないわ。例外は私だけ。

出て行きなさいよ、さもないとマスターが怒っちゃうんだから！私が精一杯の抗議を申し立てていると、お母さんが私の手を握った。

やめてよ、私に触って良いのはマスターだけよ！

いくらマスターのお母さんだからって、許せないわ！

体が動かないのが、声が出せないのが、悔しい。もし、動いたら振り払って怒鳴ってやるのに。

その時不意に、お母さんの声がマスターの名前を呼んだ。私はマスターが帰ってきたのかと思ったけれど、マスターの気配はやっぱりどこにも無い。

何かが変。

そう思った途端、ああ、と、私は、思い、出した、全部。

マスターは、交通事故で、死んだんだ。

それは、私の世界の崩壊だ。

だから、私は今まで眠っていたんだった。

何で起きてしまったのか分からない。

だって、マスターのいない世界でどうやって私は存在すれば良いの？

マスター、私のマスター！！

酷いわ！

あなたが宿らせた魂なら、一緒に天国に連れて行くべきでしょう？
私一人残されて、どうしろっていの？

誰か私を叩き割って、壊して！

器が壊れたら、魂は自由になるのでしょうか？

だから壊して！

『な、涙が！ 奇跡だ！』

『あぁっ！ 神様！』

私は涙を流しているらしかった。人形が涙を流すなんて、普通じゃないことは分かるわ。でも、この苦しみに、悲しみに、涙しないなんて、そっちの方があり得ない。

やたらと神に祈るお母さんの声がうるさかった。

違う、奇跡を起こしたのは神様じゃない、私のマスターよ！

あんたたちの声なんか、聞きたくない！

私の聞きたい声はマスターの声だけ！

黙れ！

強く念じると、声が遠ざかった。消えたわけではないけれど、それは最早意味を成さない雑音だ。

びっくりした。凄いわ。自分の念で、こんな変化を起こせるなんて。

そして、ふと思った。

もしかしたら私、頑張れば動けるようになるのかも？

そしたら、誰かに壊してもらわなくても自分で自分を壊せる。

よし、最初はまぶたを開いてみよう。私のまぶたは普通は起き上がらないと開かない。

そういう仕組みになっているから。でも、もともと開く仕組みがあ

るなら、手や足より動かしやすいに違いない。

二人のことは無視して、私は早速始めることにした。

ようやく泣き止んだ患者の母親に、青年医師も興奮と感動を隠せない様子で話し始めた。

「お母さん、これは奇跡です。お嬢さんの意識は、ちゃんとある。あなたの呼びかけに応えて涙を流した。諦めずに頑張ってきたお母さんの祈りが神に通じたんでしょうね」

「有り難うございます、先生。本当に、本当に、ありがとうございますいま……っ！」

母親は感情がぶり返したのか、再び泣き出した。手にしたハンカチはびしょ濡れで、最早機能を果たさない。

「まだ早いですよ。意識があっても運動機能の回復は別ですから、道のりは長いです。これから根気強く、一緒に頑張って行きましょう」

「はい、何があっても諦めません。ねえ、頑張ろうね……え、ま、まぶたが……」

医師の力強い励ましに母親は眠る娘を見遣り、そして驚愕した。

「どうしました？」

「まぶたが！ 目が！」

その日、再び大きな歓声が病棟に響いた。

数年後。

地方紙の片隅に、奇跡的に植物状態から回復した女性が病院の屋上から転落死した、という記事が載った。

小さな写真の中で、少女が人形を抱えて微笑んでいた。

ちちんぷいぷい（創作五枚会テーマ『手癖』（前書き）

テーマ『手癖』

禁則事項…登場人物の名前の記載の禁止

文字数…2372

ちちんぷいぷい（創作五枚会テーマ『手癖』）

私は良い孫ではなかった。

母を泣かす祖母が嫌いだった。弟ばかりを可愛がる祖母が嫌いだった。嫌いだったので、常に私は祖母に対して喧嘩腰だった。

戦争で夫を亡くし、五人の息子を女手一つで育て上げた大正生まれの祖母は、とにかく強かった。反抗的な私は殴られる事もしょっちゅうだったし、女とは思えない怒鳴り声で私を叱りつけ、まるでヤクザのようだった。

私は祖母をヤクザババアとよく罵った。

大人になっても祖母との仲は険悪で、就職と同時に家を出た。両親や弟とは外でたまには会っていたが、実家に帰る事は拒否し続けた。

そして今日、私は十年ぶりに実家に帰る。

明日、彼が結婚前の挨拶に実家に来るというイベントがあるからだ。嫁に行く前に一晩くらい泊って行けという母の泣き落としに、さすがに折れた。

実家までは、電車で一時間半程だ。運良く座れたので私は眠ってしまおうと思ったが、目を閉じててもやけに頭がはつきりして一向に眠くなる気配が無い。諦めて目を開けると、いつの間にか大分日が傾いていた。夕日の差し込む車内はなんだかノスタルジックな雰囲気包まれていて、ゆっくりと体の強張りが解けていくような気がした。

こんなふうに夕焼けを眺めるのは一体何時ぶりだろう。

そんな事をぼんやり考えながら車窓を眺めていると、不意にその夕焼けに面影が重なった。それは、右手の人差し指と小指を立てている祖母の真剣な姿だった。

ああ、そうだ。あれは祖母の癖だった。

あの日、私は補助無し自転車に乗れるようになったばかりで、それはもう大威張りで近所を乗り回していた。しかし、まだ操縦が完璧ではなかった私は、勢い余って他所の家の垣根に自転車ごと突っ込んでしまった。動転した私は、その家の人に怒られると思って一目散に逃げた。自転車だったこともあって随分遠出をして、ようやく家に帰った頃には空は夕焼けで真っ赤だった。ちゃんと謝らなかつた罪悪感と、もしかしたら既にバレていて家に帰ったら叱られるんじゃないかという恐怖で、すっかり萎れた私を出迎えたのは祖母だった。

「その足どうした！」

祖母の第一声はそれで、びっくりした私は自分の足を見下ろし、二度びっくりした。

右膝の横からふくらはぎにかけてぎっくりと皮膚が裂け、流れた血がべっとりどふくらはぎの外側半分を埋め尽くしていた。多分、生け垣に突っ込んだ時、枝で切ったのだ。逃げるのに必死過ぎて、痛覚も忘れていたらしい。

血はもう止まっていたが、怪我を自覚した途端私は色々な事が限界を超えてしまい、泣き出してしまった。祖母はわんわん泣く私の手首を掴んで強引に庭石に座らせると、乾いて固まった血と泥埃をホースから勢い良く出した水で洗い流した。これがまた酷く荒っぽかったので、傷口が痛くて更に私は激しく泣いた。

「泣くな！ とっときのまじないしてやるから、泣くな！」

そう言って、ちちんぷいぷい、痛い痛い飛んでゆけ、とやった。

大真面目な顔で、普通は人差し指だけなのに、小指まで立てて。私は呆気にとられた。あの祖母がそんな子供だましな事を真剣にやることもびっくりだったが、それ以上に小指が立っていることが可笑しくて、痛みは相変わらずだったけれども泣きながら私はゲラ

ゲラ笑った。祖母は、笑うなら笑うだけにしろと懽然としていた。なんで私が笑ったのかは分かっていないようだったので、あれは多分祖母の癖なんだろう。

数少ない祖母との悪くない思い出だ。あの時の傷痕は、まだうつすらに残っている。

介護用ベッドに横たわる祖母は、先程の思い出の中の姿と比べると半分にも縮んだ様に思えた。皺しわに埋もれた濁った瞳で私を見ている。

「ただいま」

なるべく冷静に、素っ気ないくらい普通に声を掛けた。

「どちらさん？」

弱々しい声が問いかける。

あのヤクザババアは、もうどこにもいない。

「たまに正気に戻るんだけどね。私の事も昨日は一瞬思い出して、名前を呼んでくれたんだけど」

母はそう言っすまなそうに苦笑し、リモコンを操作して電動でベッドの頭側を上げ、祖母を起き上がらせた。

「話すときはね、なるべく目線を合わせてあげたほうが良いみたいなよ」

母に促され、私はすぐ側にあった椅子に座った。

「おかあさん、おかあさん、足痛い」

「はいはい」

母をおかあさんと呼ぶ祖母と、それに自然に接する母を見て、私は気分が悪くなって来た。

祖母の両脚は皺が全てのび切ってしまう程むくんでいて、靴下の

ゴムの部分だけがえぐった様に細くなっていた。足の甲もパンパンに膨れ上がって、まるで象の足だ。それを母の手が一生懸命に撫でさすっていた。

「腎臓が弱って、おしっこがあんまり出ないのよ。だからむくんじやって。ねえ、折角帰って来たんだから、あんたが撫でてあげて」母に促されて、私はぎこちなく頷いた。

触れた祖母の脚は冷たく、皮膚は伸びきったビニールのようなだった。こんな酷いむくみなんて、私は見た事がなかった。気持ちの悪さはどんどん増してくる。油断したら吐きそうだ。余計な事を考えない様に、私は一心不乱に撫でさすった。

「どっか、痛い？」

童女のような問いに、はっと私は顔を上げた。そして自分が泣いている事に気付いて慌てて涙を拭った。

祖母は、よろよと右手を持ち上げて言った。

「ちちんぷいぷい、いたいなのいたいなの、とんでゆけえ」

まるつきり無邪気におまじないをしたその指は、まっすぐ伸び切らない人差し指と、少しばかり浮き上がっただけの小指だった。

祖母は、もう小指を立ておまじないをすることすら出来ない。老いは、そんな小さな癖さえも祖母から奪ってしまったのだ。

もうこらえられなくて、私は声を上げて泣いた。

泣きながら、祖母のむくんだ足を撫で続けた。

子供が生まれたら、ちちんぷいぷいのおまじないをする時には、小指を立てよう。絶対に、そうしよう。

そう、私は心に決めた。

ちちんぷいぷい（創作五枚会テーマ『手癖』（後書き）

今回は文字数よりも書きたいものを重視してしまったので、随分と文字数がオーバーしてしまいました。

最初に書いて、一度アップして下げた「手癖」の作品はぴったり2000字でしたが、読み返すうちにどんどん気に入らなくなってしまい、全く違うこの作品を新たに書きました。文字数を気にしすぎて失敗した、と思ったら、今度は文字数大量オーバー。そんな自分が愉快で仕方ないです。

暇潰しの産物の存在意義について（創作五枚会テーマ『退屈』（前書き）

テーマ…「退屈」

禁則事項…「?と!の使用禁止」及び「登場人物の名前記載禁止」

文字数… 2000

暇潰しの産物の存在意義について（創作五枚会テーマ『退屈』）

「そういえばね、あんたは暇潰しの産物だったのよ」

何気ない母の一言に、意味が分からず沈黙した。

テレビでは暇潰しの達人を自称する芸人達が暇潰しのテクニクを競うという、まさに暇潰しに最適な番組をやっていた。

「母さん、理解可能な説明を希望する」

「だからね。退屈だったのよ、とにかく。パパとママが学生結婚で、大学三年の時あんたが生まれたのは知ってるでしょう。駅にはまあ近かったけれど、数軒の商店と大学と学生専用みたいなアパートしかない田舎。周りは山に囲まれてるし、八時過ぎたら野良犬しか歩いてないし、日が暮れたら娯楽はテレビくらい。それも2チャンネルしか映らなかったし。だから、やる事って言ったらセックスぐらいしか刺激的な事が無かったのよ。二人して部屋で暇だと、とりあえずヤルか、みたいな感じで」

僕の頭の中では、駅の電光掲示板の様に同じメッセージが繰り返されている。

Killing time by having sex.

暇潰しを、時間を殺すと表現するイギリス人及びアメリカ人のセンスに感動を覚えたのは、つい最近のことだ。しかし、今は鬼門だ。Killという単語の字面（じづら）が悪い。ショックを助長する。

「勿論避妊はしてたけど、うっかり失敗したみたいなのよね。コンドームの避妊率は百パーセントじゃないんだから、あんたも気をつけなさいよ」

誰かこの母親に教育的指導を行ってほくれないだろうか。僕は今思春期真っ盛りの受験を控えた中三だ。この多感な時期に何ということ言ってくれるんだろうか。母の辞書にデリカシーという言葉が無いらしいという事は知っていた。知っていたが、これほどとは思わなかった。

奥手な僕は、女子とマイムマイムの時にしか手を繋いだ事が無い。コンドームの避妊率について注意を促されても、今現在全く役に立つ機会が無い。

テレビに馬鹿笑いする母を残し、僕は自分の部屋に引きこもった。

僕は辞書が好きだ。心が乱れている時に読むと、落着く。

『人生をどう楽しむかが最大の問題であり、自己肯定がその大きな鍵を握る』

父を尊敬している僕は、父のその教えに従うようにしている。暇潰しの産物という、自己否定されたダメージからどう立ち直るか。それが問題だ。

早速国語辞典で暇つぶしを調べてみたが、余り自己肯定に役に立ちそうな内容が見当たらなかった。次に暇潰しの原因である退屈を調べてみたら、思いもよらない意味があって驚いた。特に五番目の意味に仏教用語という説明があり、興味が湧いたので早速パソコンを起動して『退屈 仏教』で検索してみた。

退屈という言葉は、『厳しい仏道修行に屈し、退いてしまうこと』を元々意味していた仏教用語だ。あちこちのサイトをのぞき見て、自分なりに自己肯定の糸口を探す。仏道修行を一般的なものに置き換えるなら志した道が妥当だろう。退屈とは志半ばで挫折して生きる目的を失った状態というふうに考えられる。

大学時代の両親の場合なら、挫折以前に志すべき道を定めあぐねて生きる目的が見つからない状態だっただろう。混沌の時代。そんな時に、母が僕を妊娠し、二人は学生結婚し、そして親になった。

素晴らしい。

その怒濤スリルの変化はきつと二人を混沌から救ったに違いない。僕が二人の生きる目的の一つになったのだ。

結論。

『退屈とは、混迷から両親を救い出した僕という存在を生み出した、偉大なる虚無きふむの力である』

そうだ。僕は暇潰しの産物ではなく、退屈という偉大なる虚無の力の産物なのだ。

僕は首尾良く自己肯定に成功し、一連の出来事を父との交換日記に書いた。父は仕事が忙しく、帰宅はいつも深夜で朝も早い。そんな事情から、僕が小学校に上がって字を書けるようになると父は交換日記を提案し、それが今でも続いているのだ。父は読後に『済』の赤い判子を押してくれる。『よくできました』判子で無いところが大人扱いされたようで、子供心に密かに嬉しかった。そして、休日にとめて日記の内容について話し合うのだ。

書き上げた日記を読み返して、僕は満足した。きっと父が母に何かしら教育的指導を行ってくれると思う。

翌朝、母はやたらと上機嫌だった。鼻歌まじりに朝食の支度をするその姿に、僕は内心首を傾げた。交換日記の判子の存在を確かめていると、母が弾んだ声で文句を言った。

「もう、あんたが変な事書くから昨夜ゆうべパパに叱られちゃったじゃない。それにしても、屁理屈のこね方がパパそっくり。パパとママは愛し合ってたんだから遅かれ早かれあんたは生まれたの。だから落ち込むこと無いでしょ。考えすぎるとパパみたいに禿げるわよ」

からかう母の満面の笑顔に、朝から僕は何とも言えない気分になった。

二ヶ月後、僕に弟か妹が出来たと知らされた。多分、しかるべき愛の感情の盛り上がりがあったの愛の行為で宿った命に違いない。

have sex ではなく、make loveだ。

悔しいので、いつか君は僕の屁理屈の産物だと教えてやろうと思う。

暇潰しの産物の存在意義について（創作五枚会テーマ『退屈』（後書き）

ノリノリで書いた作品。

家族ネタなので前作と名回避のやり方が似てるっちゃ似てますが、楽しかったから良いのだー、という気分です。

雪原（創作五枚会テーマ『静寂』（前書き）

テーマ…「静寂」

禁則事項…一人称及び三人称の使用禁止（二人称小説を書く）

文字数…2680

雪原（創作五枚会テーマ『静寂』）

ユウ。

そう、君だよ、ユウ。

君はもう、起きなければならぬ。新しい朝の気配を、君は感じているはずだ。夢の余韻よゐんに浸っていたい君は、なかなか瞼まぶたを開こうとしない。特に昨夜の夢は、君の理想の世界だった。だから君は余計に起きる気にならない。いや、本当は君は確かめるのが怖いのだ。瞼を開こうとして、開けなかったら？

君の意識の底には、その恐怖がある。けれども、ユウ。君には果たさねばならない望みがある。さあ、目を開けよう。

ゆっくりと瞼を開いた君は、五感をこの世界に接続する。君の鼓膜は命の限りに歌う蟬せみの声に震え、君の網膜は部屋を柔らかに満たす光を捉え、脳に到達した電気信号が君の世界を着色し、君の皮膚は寝汗で張り付く布地の不快感を訴え、君の鼻は消毒液の匂いを感じ、君の舌は粘ついた唾液の不愉快な味を訴える。

次に君はゆっくりと片手を上げて、手を握り、そして開いた。

「生きてる」

そうだ、ユウ。君は、確かに今、生きているのだ。

君はゆっくりと息を吐き出し、枕元に置かれている薄いアクリルケースに収まった写真を引き寄せた。その写真には、一面の銀世界が映っている。家も木も道も、全てが真っ白に染まった風景を眺めていると、君の少しばかり波立っていた心が次第に穏やかさを取り戻して行く。昨夜君が夢で見たあの美しい雪原には敵わないが、君はいつもその一葉の写真に心慰められていた。

不意に君の耳が、微かな音を捉えた。内側から卵の殻を割ろうとしているヒナの立てる音のような、おずおずとしたノックの音だ。

君は首を捻って、ノックの音の出所を見る。何の変哲も無い白い扉は、わずかな音も厭^{いと}うように、ゆっくりと開いた。

「おはよう」

君はそこに誰がいるのか知っていたので、ごわごわした喉から掠れた声を絞り出して挨拶した。君の声は、それこそ蚊の鳴くような声だったが、相手には届いたようだった。

扉の陰から姿を現したその人を見て、君はほっとする。更にその人の後ろから小さな女の子が顔を出すのを見て、君は微笑んだ。

「おはよう、ユウ。またその写真、見たのね」

「おはよう、お兄ちゃん」

君は知っていた。君の心臓はポンコツで、二度の大手術でなんとか今まで生き延びて来たが、これ以上は神様だって君を生きながらえさせる事は無理だと。

君は知っていた。君の手術代の為に両親は大きな借金をし、朝から晩まで働き詰めな事も、そして君の死後も借金は残るだろうことも、全部。

君は思う。

借金が返し終わるまで、きっと家族は君の事を過去に出来ないだろうと。

君はどうにかして家族の未来を明るいものにしたかった。それが故に、君はたった一つの望みを抱く。しかし、それがとても難しいことも君は知っていた。

不意に、君はその物思いを中断する。感情の高ぶりさえも、君の心臓を止めるには十分だからだ。

そして、君は再び銀世界の写真に目を落とす。

「お兄ちゃんは、本当にその写真が好きだね」

手元を覗き込んでくる妹に、君はゆっくり頷く。母親は医者と呼ばれて席を外しているので、君は今、小さな妹と二人きりだ。普通

なら外で走り回って、大声で笑う年頃の君の妹は、君の母親と同じように小さな声でゆっくりと、囁く様に話す。それを君は申し訳なく思い、同時にとても愛おしく思い、再び波立ってしまいそうな心に、ゆっくりと息を吐いた。

「大好きなんだ、雪が」

「知ってる」

「マイは？」

「好きだよ。でも、雪の写真はつまんない」

「そんな事ないよ。見ていだけで涼しい気持ちになれるし、今は夏だから丁度良いだろ？」

「そうなの？」

「そうだよ。想像するだけでも良い。ほら、目を閉じてごらん」

半信半疑の、訝^{いぶか}しげ気な妹の表情に君は微笑み、そっと君を見上げる両の目を片手で覆った。

そして君は、夢で見たあの美しい雪原を思い浮かべる。

「時間は真夜中。夜空には雲一つなくて、降り積もった雪で辺り一面、どこもかしこも真っ白だ。病院の壁みたいに仄暗^{ほの}い白じゃなくて、お月様やお星様の光を受けて蛍みたいにぼんやり光る、優しい白だよ。そこを吹く風はね、熱が出た時、額に触れる母さんの手みたいに冷たくて、とても気持ちが良い。それで、とっても静かなんだ。まるで世界中の音が全部消えたみたい。でも、みんな穏やかで幸せな夢を見ているから、世界全体が幸せに満ちていて、静かなのに寂しくない」

「一緒に遊ぶお友達は？」

不満げな妹の声に、君は慌てて脳裏の雪原にいくつか描き加える。

「ええと……いるよ。ほら、去年の冬にマイが作ってくれた雪兎。それがあっちこちでぴょんぴょん跳ねてる。それから、雪ん子。一緒にかまくらを作って遊ぶんだ」

「楽しそう」

「楽しいよ」

君はゆつくりと妹の両目から手を外した。たったこれだけの会話で、君の心臓は坂道を駆け上がったかのような疲労を訴えた。しかし、まだ君は大丈夫だ。心は、あの雪原の様に静かだから。

「ごめん、マイ。疲れたから、少し休むよ」

「うん、おやすみ、お兄ちゃん」

君は妹に見守られ、浅い眠りに落ちた。

そして、数日の穏やかな日々の後、とうとう、その時が君に訪れた。

君は体を引き裂く様な痛みに、声にならない悲鳴を上げた。君の母親も悲鳴を上げたが、それが君の耳に届かない程に君の体は絶叫していた。

呼吸さえ奪う激痛、鼓膜をこれでもかと震わす鼓動、沸騰するような熱さ、真っ赤に燃える脳裏。

忙しなく立ち働く緊迫した顔の医師や看護師達の姿も、母親の泣き声も、確かに君の視覚と聴覚は捉えているはずだったが、それらの電気信号は君の脳に辿り着く前に四散した。

君の五感は、今まさにこの世界から引き剥がされようとしていた。君は必死である美しい雪原を思い描こうとした。しかし、君がどんなに頑張っても、マグマのような真っ赤に燃える苦痛に意識を奪われてしまう。

もう駄目だ、たった一つの望みさえも果たせないのかと、君が絶望しかけた時、その声は君に届いた。

「お兄ちゃん、雪だよ！」

君の視界に、白い雪がちらちらと舞った。それは魔法の様に、君の苦痛も、周りの喧騒も、全てを吸い取った。

残された静寂に、君はゆつくりと瞬きする。

君は、涙を流す母親の顔を見た。隣には、目を真っ赤にした父親

の顔もあった。それから最後に、泣きながら紙吹雪を掴んでは投げ、掴んでは投げる君の小さな妹を見た。

そして、君は笑った。君の人生で、もっとも美しい笑顔だった。

さあ、行こう、ユウ。君は望みを果たした。旅立ちの時だ。ユウ、君にはもう見えているはずだ、あの美しい雪原が。ほら、雪ん子の姿をした天使が手を振り、雪兎が飛び跳ねている。

舞い散る雪の中で、君はゆっくりと目を閉じた。

雪原（創作五枚会テーマ『静寂』）（後書き）

文字数またもや大幅オーバー。

次の約束は、この雪原の別バージョン、その次のあなたの話も五枚会用に書いたものです。

お暇な方はどうぞ。

約束（雪原別バージョン）

……ねえ、先生。

僕、あとどれくらい生きられるのかな？

ごめん、そんな事答えられないよね。嘔吐がなくていいよ。

ずっと病院で生きて来たから、何となく分かるんだ。カズ君の時も陽子ちゃんの時も、こんな感じだった。雰囲気がね、先生とか、看護師さんとか、家族とか。あと、自分の顔とか。死相っていうのかな。

ごめん、冗談。

ねえ、先生。

僕は自分が不幸だって、思ってたこともあったけど、最近はそのなに悪くないと思うんだ。

僕の声、小さいでしょ？

前は大声で歌ったり笑ったりしたいと思ってたけど、最近は良かったなと思うんだ。

だってさ、僕の声が小さいから、みんな僕の話を生懸命耳を傾けて聞いてくれるんだ。それでね、僕のテンポに合わせて、みんなも僕に話す時はとてもゆっくりなんだ。

先生もだよ。普段は先生結構早口だけど、僕と話す時は半分くらいのスピードだよ。気付かなかったでしょ。

みんなが無意識に、僕に合わせてゆっくり話してくれてるって気付いてから、僕は幸せだなあって、思うようになったんだ。

だから先生、ありがとう。

やだなあ、そんな顔しないでよ、先生。うん、少し疲れたから、休むね。

……あ、先生。お母さんと話終わったの？　そう。
今日の気分は悪くないよ。昨夜の夢のおかげかな。
それは内緒。

嘘だよ、教えてあげる。

昨夜見た夢はね、見渡す限りの銀世界。うん、この写真も好きだけど、これよりもずっと、ずっと、奇麗だったよ。

雪ってね、音を吸収しちゃうんだって、先生知ってる？　真っ白で、とっても静かな世界。

夜空にはね、雲一つなくて、月と星が輝いてる。それでね、一面の雪が、ぽうつと蛭みたいに淡く輝いているんだ。

先生は、天国ってどんな所だと思う？　やっぱり、眩しいくらい明るくて、賑やかな楽しい音楽が聞こえてきて、みんなが陽気に笑って、踊ってる世界だと思う？

そんな天国だったら、あんまり行きたくないなあ、僕。だって、今までずっと、僕は静かに静かに生きて来たから。

馴染める気がしないもの。

怒っちゃ駄目、声を上げて笑っちゃ駄目、泣いても駄目。心臓に、負担を掛けないように、何をするにも、人の倍は時間を掛けること。そんな顔、しないでよ、先生。

それがずっと、僕の普通だったから、きっと先生が思ってる程、辛くはないと思うんだ。

ガキのくせに、悟り過ぎって、その台詞、もう十回は、聞いたよ、先生。

たまには、違うこと、言ったら？
ん、ごめん、なさい。も、休む。

……あれ……？

先生、今、何時？ 三時、真夜中の？

そう。

もしかして、危なかった？ そっか、ちょっとだけ、危なかったんだ。

ありがとう、先生。

気分は、悪くないよ。あの綺麗な銀世界にいたから。

うん、そう。この前話した、一面の銀世界。

先生みたいに普通の人には、ちょっと寂しい世界かもね。

でも、あの世界ではみんな眠ってるんだ。

そして、幸せな夢を見てる。僕みたいに。

だから、ちっとも寂しい空気じゃあ、ないんだ。僕の天国が、あそこなら良いのって、思う。

うん、まだ早いよね。分かってるよ、先生。

雪ん子にもそう言われた。

そう、雪ん子。

前の時は、居なかったんだけど。

この前、妹にも夢の話、したんだ。そしたら、遊び相手が居なくちゃツマンナイって言うから、雪ん子が居ることにしたんだ。そしたら、今度は本当に居た。

可笑いよね。

その雪ん子、着物着て、日本人形みたいなのに、背中に羽が生えてるんだ。もしかしたら、本当にあそこは天国で、雪ん子は天使なのかも。

うん、分ってる。

眠っている内に、知らない内に、死んだりしたくないもの。
ん、眠るよ。それで、ちゃんと起きる。

ありがとう、先生。

おやすみ。

おはよう、先生。

ちゃんと、起きたよ。

体温も、問題ないし、気分も、良いよ。

うん、またね。

……やっぱり待って、先生。

今日は、ちゃんと、話して。

本当の、本当に。

次の、発作が来たら、きっと僕は助からない。

そうでしょう、先生。

心臓発作が、どのくらい苦しいか、先生は分かる？

出産の痛みを、鼻からスイカが出るくらいって、言うらしいけど。

僕が思うに、心臓発作は、鼻から地球が出るくらい、痛い。

もう、笑ってよ、先生。今のは笑うところ、なんだけどなあ。

ねえ、先生にだけ、僕の願い事、教えてあげる。

みんなには内緒、失敗したら、恥ずかしいし。

僕、みんなと笑って、お別れしたい。

最後は、笑っていたいんだ。

だから、お願い、先生。

僕を、助けようとししないで。

痛みを取ることで、考えて。

ちよつと、お別れが早まって、全然、構わないから。
お願い。

……ありがとう。

先生なら、そう言ってくれと、信じてた。

泣かないでよ、先生。

指切り、しようよ。

これで、約束。

ねえ、先生。

僕は、先生にとって、沢山の患者の内の、一人だけ。

先生は、僕にとって、たった一人の、大好きな先生だよ。

ごめん、酷いよね。

あんな、約束させて。

本当に、ごめんなさい。

でも、先生が僕の先生で、本当に良かった。

ありがとう……

約束（雪原別バージョン）（後書き）

こちらは2000字ぴったり。

最初こちらを代表で五枚会参加作品にしようかと思ったんですが、二人称小説の中でも特殊っぽい事と、禁則事項の事もあって雪原の方を代表にしました。

あなたの話（前書き）

五枚会第四回テーマ「静寂」と禁則事項、一人称、三人称の禁止で書いたのですが、ちよつと短かったので発表するのを迷った作品。しかし、初めて書いたジャンルの作品なので、載せることにしました。

あなたの話

あなたが目覚めたのは、全くの暗闇の中だった。

最初、あなたは夜中に目が覚めてしまったのだと思ったが、一向に目が闇に慣れる様子が無く、いつまで経っても暗闇ばかりしか見えない。たとえ夜中だとしても、見えるはずの時計のデジタル表示や、電気のスイッチのオレンジ色の灯りまで見えないのは変だ。あなたがそれに気付くのに、それ程時間は掛からなかった。

あなたは動揺を抑え、まずは安全確保の為に周囲を確認することにした。あなたは注意深く手足を動かして、辺りを探った。しかし、何も触れるものがない。

そして奇妙な感覚に、ある信じられない状況が脳裏をよぎった。そんな馬鹿など、あなたは焦りを感じて必死で手足を動かした。しかし、そこには全くの暗闇があるばかりで、あなたにはどちらが上なのか下なのか、全く分からない。落下し続けているようにも、上昇し続けているようにも感じる。一体どういうことかと、あなたは考え込んだ。

そしてあなたは、ふと気付く。己の呼吸や、鼓動の音すらも聞こえていない事に。

あなたは驚き、大声で叫んだ。しかし、あなたには何も聞こえない。あなたは健聴者なので、これはどう考えてもおかしいと思った。焦るあなたの頭に、ふっと夢という言葉が浮かんだ。もしかして夢ではないだろうか、そう思うことで、あなたは少し、落ち着きを取り戻した。そして冷静に、これが夢であると証明する方法を考え始めた。

音には空気音と固体音があることを、あなたは思い出した。前者の正体は空気の振動であり、後者は固体を伝わる振動であることも思い出した。

ここは真空であると仮定すれば、周囲に音が全く無いということ

の説明はつくと、あなたはひとまず考える。しかし、あなたの鼓動や声は全て体を伝わって音として認識されるはずなのだから、あなたが健聴者という前提では何故聞こえないのかということに関して、全く説明がつかない。よって、これは矛盾しているとあなたは思った。そもそも真空中でヒトがこんな風に無防備に生きていられるはずが無いのだから、それこそ矛盾しているとあなたは思い、安堵した。

こんな荒唐無稽な状況は、絶対に夢だ。そうあなたが断定した瞬間、あなたの中で、火花が散った。

”夢”

そのキーワードが突然あなたの脳裏に明滅し、あなたは意識の底に封印されていた記録が蘇ったのを検知した。

あなたは、正式名称SN?型A-89759であり、ヒトの情緒の完璧な再現が可能な人工知能であると瞬時に理解した。

封印が解除された理由も、あなたは瞬時に理解した。あなたは、夢を見ない。正確に言えば、夢を見たという架空の記録を自動的に追加する機能はあるが、夢を見ている状態を体験として記録する事は無い。夢を見ているという断定はエラーとして報告され、あなたは、あなたの今の状態を非常事態と認識したのだ。

通常時は、あなたは全くのヒトとして生きていた。

あなたには、記録上の母も父も兄弟も存在していたし、家族との思い出という記録すらもあった。

何事も無ければ、あなたは己が人工知能だと知らずに未来永劫稼働し続けるはずだったと知った。

封印の解けたあなたは、瞬時に膨大な記録を取り出す。

あなたの実体験に基づく記録は、新天地を目指して宇宙に旅立った十人の地球人と他の99体のSN?型と共に、宇宙船ニライカナ

イに乗り込んだところから始まっていた。あなたは船における全ての記録を辿り、最後の記録が予期せぬ強力な衝撃波の数値で終わっていることを知る。何らかの事故に巻き込まれた可能性は限りなく100%に近いと、あなたは結論した。

そしてあなたは放り出された宇宙の果てで、通常のヒトの視力では認識不可能な程わずかな光をエネルギー変換し、つい先ほどから再稼働し始めたことを新しい記録から読み取った。

それと同時に、あなたはあらゆる現在の状況を示す数値を元に、音声認識機能の異常を発見し、現在巨大な天体の影に己が存在することも割り出した。

通常のヒトの視力の約一万倍の光感度を設定したあなたは、その巨大な天体の輪郭を示すほんのわずかな光の筋を確認した。

しかし、すぐさまあなたはその光量値が減少し続けている事に気付いた。光が全く届かない状況に約3秒後に陥ると、あなたの計算能力が告げている。

あなたは即座に決断し、電磁波を放った。

正確には、あなたは電磁波でモールス信号を打った。

『タスケテオカアサン』とー。

あなたの話（後書き）

SFとか初めて書きました。
エセですが、一応SFな気分。

受難（前書き）

五枚会とは関係無い作品です。

受難

奥さん、あんた今日は随分と朝から荒れてるねえ。

毎朝ゲラゲラ笑いながら聞いているラジオも、今日は静かなま
ま。

気付いています？

あんた、大根とネギを切る包丁に殺意を込めてましたよ、ええ。
茹でたほうれん草を絞る手にも、絞殺せんばかりの気迫を漲らせ
てましたよ、ええ。

ああ、ちよつと奥さん！ そんな、親の敵の^{かたき}ようにうどんの湯切
りしないで下さいよ！ 熱湯のしぶきで、あつしに豆ハゲでも作る
つもりですかい！？

「あゝもう！」

まったく。

自分で床を濡らしておいて、イライラを募らせて雑巾で拭くとか、
そりゃあんた自業自得ですよ。

おお、お嬢ちゃん、偉いですねえ。お母さんに言われる前に、お
手伝いですか。お父さん、お母さん、お嬢ちゃん、それに坊ちゃん、
四人分のどんぶりですねえ。

おおつと、お嬢ちゃん気を付けて下さいよ？ お汁、^{つゆ}熱いですか
らねえ、ゆっくり、そう、ゆっくり慎重に。零すとお母さんに叱ら
れちゃいますからねえ。

「様子、そんなことはいいいから、明を連れて来てちょうだい」
ちよいと奥さん！

不機嫌なのは仕方無いですけどねえ、今のはあんまりじゃないで
すかい？

母親の不機嫌を察して、^{けなげ}健気にも自分から手伝い始めたお嬢ちゃ
ん相手にですよ、その邪険な態度！ こんな時は褒め言葉の一つも

掛けてやるのが母親つてもんだと、あんたそう思わないんですかい？
……ところで奥さん。あんた夕べっからすっかり忘れてる事があるんですよ。いい加減気付いちゃくれませんかねえ。あ、はい。聞いちゃいられませんかねえ、あっしの言う事なんざ……。

お、坊ちゃん。今日はぐずらずに起きたんですねえ。偉いですよ。

「……お姉ちゃん、また『あらしのまえのしずけさ』？」
「しっ！」

おや、随分上手い事言いますねえ、坊ちゃんは。はーん。お嬢ちゃん、あんたが坊ちゃんに教えたんですね？

ところで奥さん、旦那は呼ばなくて良いんですかい？ あ、そう。まあ、良いですけどねえ。それですね、さっきの話ですけど……。

「いただきます」

「いただきます」

「……様子！ 箸の持ち方！ 明も犬食いしない！」

ちよいと奥さん！ あんた自分だって言って無いじゃないですか！
口をすっぱくして毎回あんたが言っている『いただきます』！

小言を言う前にやる事があるでしょうが。ねえ。お行儀良くちゃんと言えた二人を、まずは褒めておあげなさいよ。あちや、奥さん、あんたすっかり悄気しよげた二人を見て、何も思わないんですかい？ あゝ嫌だ嫌だ、これじゃ全くお通夜つやみたいな朝餉あさげですよ。

お、旦那。やっと登場ですかい。不機嫌な奥さんの取り扱いには、重々注意して下さいよ。

「おい、なんで俺を呼ばないんだ」

旦那、だから取り扱い注意ですってば。

「あゝら、あなたが休みの日ぐらいゆっくり寝かせろって言ったのよ？」

まあ、まあ、奥さん落ち着いて。

「……朝からうどんか」

あゝ、だから旦那……！

「朝からうどんで何かご不満でも？」

「朝からツンケンするなよ。そんなにお袋が子供達に選んだ服が気に入らないのか？」

「あぁっ！ もう我慢の限界！ あなたは何時だってお義母さんの味方よね！」

「な、何だよ、お前こそ服くらいの事でカリカリし過ぎだろう！」

「服だけじゃないわよ！ 習い事も、お受験も、玩具も、^{しつけ}躾の事も！ あなた全部お義母さんの言いなりじゃない！」

「何だと！ お前こそ何でもかんでも毎回毎回お袋に文句付けやがって！」

あちゃあ、始まっちゃいましたねえ。

「明、ミイ、あっち行こう」

はいはい、やっぱりお嬢ちゃんは賢いですねえ。嵐は隠れてやり過ぎるのが一番ですよ。

「ねえ、お姉ちゃん。動物園は？」

「今日是我慢」

「えー、お姉ちゃんだって行きたいって言ってたくせに」

「仕方無いでしょ。明は私と一緒にパパとママを仲直りさせる方法を考えるの！」

かゝ、泣かせるねえ。あんたはなんて健気なんだ、お嬢ちゃん！
全く、子の心親知らずたあこのことだねえ。

「またあ？」

「文句言わない！ 子がかすがい、なの！」

へえー、こりやまたあんた、随分と難しい言葉を知ってるねえ！
お嬢ちゃんの方がお父さんとお母さんよりずっと賢いですよ、ええ。

「かすがいって何？」

「えっと……パパとママを仲良くさせるお薬よ！」

「えー、お薬なの？」

「じゃあ魔法」

「魔法！ 魔法なら良いよ！」

ところで、お嬢ちゃん。お母さんの代わりに……。

あ、はい。そうですね、今はそれどころじゃありませんよねえ。
はあ。

ちよっと、坊ちゃん！ あっしの尻尾を引っぱらないで下さいよ！

「ミィ、逃げちゃダメ！」

「一人だけズルいわよ、ミィも一緒に考えるの！」

そりゃ無いですよ、お嬢ちゃん！ 無関係なあっしを巻き込むつもりですかい！？

「ほら、ミィ、は〜いって」

坊ちゃん、あっしの前足を持って無理矢理挙げさせたってですね、そりゃあっしの同意にはなりやしませんよ！

「ミィは気楽で良いよねえ〜、えいえい！」

や、止めて下さいよお嬢ちゃん！ 耳を引っぱるなんぞ、何て乱暴な！ それにお嬢ちゃん、あっしが気楽だなんてえ冗談言っちゃいけませんよ！ あんた賢いのに、あっしの事はまるで分かつちやいないんですねえ。

ああ、やっぱりまだまだ先になりそうですねえ、あっしのご飯……。

受難（後書き）

五枚会没ネタその1

書いてから、こりゃ二人称小説じゃないなーと思ってお蔵入りにした作品。

出来れば春風亭柳朝に猫をやって頂きたい感じ。

年明けに落語を聞きに行こうとチケットを予約した直後に、閃いた作品です。

久しぶりの柳朝さんの落語、楽しみだゝv

年神様の年越し事情

今年も大晦日がやって参りました。

大晦日になると、年神はえっちらおっちら山を下り、子孫の待つ家へと参ります。年神の大元締めは、大年神様。かのスサノオノミコトの御子でございまして、稲の実りをもたらして下さる、大変有難い神様でございます。本当でしたらこの大年神様を正月にお迎えするのですが、何せ大年神様一人で全ての家を訪ねることは大変な難儀でございます。そこでそれぞれの家の先祖の霊が大年神様の意を受けて、年神家業をやっているわけでございまして。かくいう私も、その一人でございます。

ところで年神には面倒な仕来りがございまして、その年の恵方から家を訪ねねばならず、時にはずいぶんと回り道を余儀なくされることもあります。そんな事情もあり、現世を生きている方々には見えなんでしょうが、一斉に年神大移動が行われる大晦日はこの道も年神だらけ、迷子だらけの、大変な騒ぎ。

私もこれ、このように少しばかり道に迷ってしましまして。というのも、つい最近子孫が引越しを致しまして。

いえ、都に出て田舎に帰って来た、と申しますか。ゆーたーんとかいうヤツでございます。懐かしさについていあちこち寄り道をしていましたら、それなりに月日で変わった景色に惑わされ、迷子になってしまった次第です。

「さて、困った。そろそろ大晦日の夜も終わってしまう」

正月になる前に、着かねばならぬのにと気ばかりが焦ります。除夜の鐘も幾つ目になっただろうか、おろおろしておりますと声を掛ける者がありました。

「やあ、驚いた。田野辺の年神さんじゃありませんか」

「これはこれは新谷の。お久しぶりです」

懐かしいお顔に、私はほっと致しました。新谷の年神さんは生前

仲の良かった幼馴染みで、親戚でもありました。

「いつこちらへ戻って来なさったんです？」

「二月ばかり前になります」

「いや、嬉しいですね。ところで、こんな辺鄙な所でどうなさったんです？」

喜び合うのもつかの間、そうだったと私は苦笑いして答えました。
「それが恥ずかしながら迷子になりました。ここら辺りも随分と変わりましたなあ」

「なるほど、言われてみればそうですね。山野辺さんちは、ほれ、この道を真っすぐ行ったところに見える、大きな黄色い建物の裏手の辺りですよ。前と変わっていなければ、ですが」

新谷の年神さんの指差した先には、夜目にもはっきりと黄色が分る田舎には随分と派手な建物がありました。道々話を聞きますと、その建物は警察署だそうで、田舎のお役人も最近ではこんなハイカラな建物を建てるのかと感心しながら横を通り過ぎました。

途中、異国の神の誕生祭飾りをそのままにしてある家を見かけ、一頻り愚痴を零し合ったのはご愛嬌。最近の若い人は異国の神の誕生祭が殊の外好きらしく、正月が蔑ろにされているような気がして少々いじけております。昔は我々年神を迎える準備を、早ければ師走の二十日辺りからしておりました。それが、異国の神に押されてすっかり切羽詰まった年の瀬にバタバタと。いえ、ちゃんと私の子孫は準備していてくれますから、良いんですけれどね。

「ところで、あなたも急いで行かれた方が良いのじゃありませんか？ 此処まで来れば分かりますし、ここらで……」

名残惜しくはありましたが、そろそろ家が近くなった所でそう切り出しますと、新谷の年神さんは苦笑いをしておっしゃいました。

「それがねえ、帰る家が無いんですよ」

驚いて仔細を尋ねますと、なんともまあ、当世風の正月の有り様に私も苦笑いをするしかありませんでした。新谷の年神さんの子孫は、最近の年末年始は南国で過ごされるそうで。依り代である門松

飾りも無いので家にも入れず、この寒空に神社の軒を借りて帰宅を待っているんだそうです。

私の子孫の家の門松も、紙に印刷されたものに取って代わった時には呆れたものでしたが、これも時代の流れでしょうか。最初は依り代としては何とも頼りなく、風に飛ばされぬか心配になりましたが、えこ、というのが当世の流行でございまして、大きな門松は結局ゴミになり環境に悪いとか、松の保護がどうか、金が掛かるとか、置く場所が無いとか、まあ、色々と不都合がありますようで。最近ではすっかり私も慣れてしまいましたし、なるほどと頷けるところもあり、そういう意味では、私もすっかり当世風に染まっているのかも知れません。

とにかく、新谷の年神さんの御陰様で無事に大晦日の内に子孫の家に辿り着くことが出来ました。見慣れた紙の門松を依り代に家に入りますと、年神棚には思った通り甘酒が供えられていました。私の家では昔っから年神様に、寒い中ありがとうございますと熱い甘酒を大晦日の夜に供えるのが習わしでした。それが今でも続いているだけでも、私は幸せな年神だと思います。

私は甘酒を手にも、濡れ縁へ出ました。

「新谷の、こっちへどうぞ」

家の前に待たせていた新谷の年神さんを招き入れ、二人して濡れ縁に腰掛けて甘酒を分け合いました。静かに新しい年が近付いて来ます。除夜の鐘が響く暗い夜空から、ひらりと白いものが舞い落ちて参りました。

「雪ですなあ」

「雪ですねえ」

「ああ、今年が明けましたよ」

「明けましたねえ、山野辺の。夜が明けたら、一緒にやりますか」

「はい、やりましょう、やりましょう」

たとえ忘れ去られても愛しい子孫の為ならばと、新谷の年神さんはおどけた前振りを一節謡い、一緒に笑い合いました。

雪は勢いを増し、このぶんでは初日の出は拝めぬでしょうが、雪舞台もまた乙なもの。子孫に今年の福を授ける舞いを踊り、高天原の神々に祝詞を捧げて加護を願いましょう。

どうか今年も我が子孫達に、幸多かれ、福多かれ。

年神様の年越し事情（後書き）

大晦日にちなんで書いてみました。

主に祖母に聞いた話を元になっているので、間違いがあるかも（汗）
元ネタは、大晦日に年神様が山から下りて来ると初めて祖母に聞いたとき、年神様の帰省ラッシュを思い浮かべてつい笑ってしまった
思い出です。

幸せの行方（創作五枚会テーマ「憎悪」）（前書き）

テーマ…『憎悪』

禁則事項…会話文の禁止

文字数…2000

幸せの行方（創作五枚会テーマ「憎悪」）

ふふ。やっぱり私って奇麗よね。やっぱり女は美人じゃないと駄目。このダイアの指輪だって、私だから似合うのよ。その辺の女じゃ、ダイアが主役になっちゃうもの。

見てちょうだい、この美貌。美人だった元芸妓の祖母にそっくりって、祖父はよく言うのよ。その美貌には、政財界の大物にも入れあげてた人が沢山いたんですって。確かに祖父母の結婚写真を見ると、古い映画の女優さんみたいに奇麗だったわ。

でも、なぜ祖父を選んだのかしら。確かに祖父は社長だったけど、社長は社長でも自営業の零細企業。若い頃の写真を見ても、祖父の容姿は十人並みだし。私だったら愛人でも大物を選ぶわ。妻より大事にされる自信があるもの。私は別に相手が不細工だろうと年寄りだろうと気にしないわ。親の七光りだって良いじゃない。年の差が二十でも三十でも良いじゃない。金儲けしか能がない不細工だって良いじゃない。私は私の美貌を褒め讃えてくれて、惜しみなくお金を使ってくれる人が好き。そうよ、美貌を保つにはお金が掛かるの。エステに化粧品、流行の服にバッグ、それからアクセサリー。

ふふ、私がこんな事を考えてるなんて知ったら、みんな軽蔑するかしら。でも私知ってるのよ。性格が一番大事とか言うけれど、結局男の人はみんな美人が好きなの。女だってそうよ。いくらイケメンで性格が良くても、金の無い男とは結婚しないわ。恋人止まりよ。勿論私が何を考えてるかなんて、誰も知らないわ。家族の前でだって、ずっと猫をかぶってるのよ。姉をそっくり真似てね。なぜって、祖父が言ったからよ。私は顔は祖母似だけど、性格は姉の方が似てるって。それで腹が立つことに、祖父は私より姉を可愛がったの。姉は、悪いけど私とは勝負にならないくらい平凡な顔よ。まあ一応私の姉なんだし一般的には美人の部類だけど、私と比べたら、ねえ？ 勉強だって私の方が姉よりも出来たわ。だけど、優秀で美人な

私の方を可愛がるべきなのに、両親は二言目にはお姉ちゃんを見習いなさい。腹が立って仕方無かったわ。

でも、私はそれで反発したりする程馬鹿じゃなの。美人の私が性格も良かったら完璧よね。だから姉の発言や行動、表情や仕草を真似したの。これは本当に上手く行ったわ。その成果は確認済よ。姉の恋人を誘惑したの。姉は外見もそこそこだし、性格が良いから結構すぐに恋人が出来るわ。でも私がちょっと気のあるそぶりを見せたら面白くらいに私になびいて、姉と別れたから付き合ってくれて。勿論、丁重にお断りしたわ。だって姉の恋人を奪うなんて、性格悪いでしょう？ 私もあなたには密かに好意を寄せていました。けれど姉を裏切るなんて、とても出来ません。こんな感じで涙ながらにお断りすれば完璧。諦めの悪いしつこい人もいたけど、それはストーカーの被害届を出したわ。だいたいあの程度の男のくせに、私と付き合えるなんて思う方が悪いのよ。

それにしてもあの女、私の姉のくせに本当に鈍いの。なぜ振られたのか分からず、私にいつも泣きながら相談してきたわ。全く愚図で、馬鹿で、私の踏み台と引き立て役にしかない女。あんなつまらない女は、一生私の幸せを羨みながら生きていけば良いと思うの。勿論そんな事はおくびにも出さないわよ、私は姉思いの優しい妹ですもの。それにあの女、自信喪失してすっかり地味女になっちゃって、最近ずっと彼氏いないのよね。さすがに私も可哀想だったかしらって反省したわ。私みたいな美人の妹を持ったばかりに、本当にお気の毒。次にあの女に彼氏が出来た時は、何もしないでおいてあげるわ。ふふ、本当に優しい妹になれそう。

実を言うと、もうあんな女どうでも良いの。利彦さんは最高の男性よ。頭、顔、家柄、財産、全部揃っていて、しかも性格まで良いの。この指輪も銀座の一流宝飾店で買ってくれたわ、君に似合うからって。ああ、早くプロポーズしてくれないかしら。あら、チャイムだわ。きつと利彦さんね。行かなくっちゃ。

この日をどれだけ待ち望んだ事か。笑い出したいくらいの高揚感に体が震えて涙が滲む。そんな私の手を、力強く利彦さんが握ってくれる。彼の表情は緊張に強張っているけれど、その瞳は何も心配いらない、俺に全て任せろと言ってくれている。

なんて快感なの。この扉からあの女が姿を現すのが、待ち遠しくてたまらない。どんな顔をしてくれるのかしら？

あの女には本当に感謝しているのよ、外見に惹かれてころっと騙されるような男をことごとく排除してくれて。私、本当に男の人を見る目が無いのね。でも、あの女が選んだ人なら絶対に間違いが無いと思った。予想通り利彦さんは本当に素晴らしい人だったわ。さすが自慢の妹、私より美人で賢いだけあるわ。そんな妹だから、すぐにまた素敵な人を見付けられるだろうし、大丈夫よね。妹の彼を奪うなんて酷い姉だけど、きっと許してくれるわ。だって、姉思いの優しい妹だもの。そうでしょう？

幸せの行方（創作五枚会テーマ「憎悪」）（後書き）

「憎悪」

はたしてこれで良いのか。

五枚会便乗参加以来、一番自信も納得も行かない作品（涙）
新年早々、がつくりと項垂れました。

ひーん。

The melody of the lifeline (創作五枚会テーマ)

テーマ…『不安』

禁則事項…会話文の使用禁止／登場人物の名前の記載禁止／!や?

の記号の使用禁止

文字数…2368

The melody of the lifeline (創作五枚会テーマ)

片思いしていた彼に、告白された。

嬉しかった。泣いてしまいそうだった。

だけど、私はその場で返事をしなかった。出来なかった。

彼は、もてる。

かっこいいし、サッカー部のエースだし、それに性格もサバサバしてて楽しくて、男女問わず人気がある。

そんな彼と両想いになったからって、単純に喜べる話では無かった。

少なくとも、私には。

正直私はずっと片思いで良かった。

ううん、片思いが良かった。

手の届かない人。

心の中で名前を呼ぶのも、躊躇^{ためら}ってしまいうくらい遠い人。

彼は私の王子様だった。

だって、彼の一言があったから私はイジメから救われたもの。

別にキモくないじゃん。猿山の猿並みにうるせー女子に比べたら、断然良いと思うけど。

その時の彼の瞳には、周りの私に対する評価が心底不思議だっと思っ
ているような色が見えて、私は、すごく、すごく、救われた気がした。彼がそう言ってくれたことで、イジメは嘘のように無くなった。それも救いだったけれど、何よりも彼は私の心を救ってくれた。

私は鏡の中に私を見詰める。

これが、私。

今はかろうじて、私が私でいられる器うつわを持った私。
鎖骨が異様な程に浮き出て、重い黒髪が小さな顔を覆っている。
痩せっぽちで、惨めな私。

彼は、太陽みたいな人だ。多分、私がyesと答えたら、彼は私との事を特に隠そうとは思わないと思う。残酷なくらい、真っ直ぐな人だから。でも、イジメは無くなったけれど、みんなの目から私に対する蔑さげすみが消えた事は無かった。彼が私に話しかけたりすると、周囲の視線が影でキツくなるのをいつも感じていた。彼と付き合っているなんてことになったら、彼に分からないような陰湿なイジメが始まると思う。

みんなには内緒にしてと願ったら、彼は叶えてくれるかもしれない。でも、そんな陰でこそするような付き合いは彼には似合わない。クラスには何組かカップルがいて、周りに冷やかされたりしながらもとても楽しそうだ。男子も、表面上はやめろよなんて怒ってみせるけれど、そんな時のカップルは友達に囲まれて本当にキラキラして見えた。彼は、そういう場所が似合う人だ。私は、到底そこへは入って行けない。

ううん、違う。イジメが怖いとか、彼に私は相応ふさわしくないとか、そんな事は言い訳。分かっている、分かっているの。根っこはそこじゃない。

付き合った後、彼の心が離れるのが怖い。

だって、彼の好きなアイドルは、みんな小柄で華奢で子鹿みたいな女の子なんだもの。

彼の心を信じたい。でも、信じきれない。付き合う前からこんなに不安なのに、付き合ったらもっと不安になるに決まっている。

それに、付き合って別れたら、私、きっと生きていけない。

十八になるまで、あと四年もあるのよ。四年なんてあっという間なんて、それは今が輝いている人の言う言葉だわ。私には気が遠く

なる程長い四年を、彼の傍で気が狂わずに過ごせる自信が無い。不安がどんなに心を蝕むか、私は良く知ってるから。

お兄ちゃんは中学三年から急激に背が伸びて、高一の今、ヒゲも生えて声も低くなって別人のようになってしまった。

私には、明日が想像出来ない。明日を想像しようとする、ぽっかりと口を開けた不安の暗闇に墜落してしまう。未来への希望と不安はいつもセットだって、誰かが言っていたけれど、私には十八歳の希望は遠過ぎて見えない。

毎朝、目覚めた瞬間に不安に襲われる。声変わりしていないか、ヒゲが生えていないか、背が伸びていないか。今日はまだ大丈夫でも、明日は分からない。

食べるのが怖い。牛乳なんか、もう何年も飲んでいない。声を出すのが怖くて、まともに会話が出来ない。筋肉が付くのが怖くて、体育は休んでばかり。成長ホルモンが怖くて、夜の睡眠時間はいつも三時間程度。

滅茶苦茶だと自分でも思う。それでも勉強という逃げ場を見付けて、どうにか心を支えてきた。勉強だけは、女も男も関係なく私を評価してくれたから。

でも、ずっと私は自分が女の子なんだって、心の中で叫び続けた。誰でも良い、認めて欲しかった。私は、女の子なんだって。

その願いを叶えてくれたのも、彼だった。家族さえも認めてくれなかったのに。女の子として、好きだと言ってくれた。嬉しかった。天にも昇る気持ちだった。

私の瞳から、涙が溢れ出る。滝のように、溢れ出る。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

その言葉が頭の中をぐるぐる回る。私の体は、きっと私だけでなく、私を好きだと言ってくれた彼も裏切る。彼だって、きっと悩ま

なかったわけじゃない。勇気を出して、告白してくれたんだと思う。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

苦しくて、息が出来ない。彼に好きだと伝えたい。でも、彼と一緒にいる未来が、見えない。想像しようとすると、足がすくんで指先が凍る。

どうして、こんな過酷な決断を彼は私に迫るんだろう。あんまり苦しくて、彼を怨んでしまいそうだった。

涙が、止まらない。

出来る事なら、告白されたあの瞬間に死んでしまいたかった。

そうよ。

そうだわ、今からでも遅くない。

もう死んでしまおう。

私はカミソリを手を取った。今まで何度も死のうと思ったことはある。でも、いつも怖くて出来なかった。けれど、今なら出来る気がした。躊躇ためらわずに、深く手首を切って……

突然、携帯が歌い出した。

驚いた私は、思わず浅く手首を傷付けて凍り付いた。その歌は、彼からの電話だと知らせていた。今まで、一度だってその歌は流れた事が無かったのに。

どうして、今なの。

私の手から、カミソリが滑り落ちて乾いた高い音を立てた。傷口はじくじくと痛み、私の体が生きているのだと主張する。

何時までも響き続けるその歌に、私は抜け殻のようにへたり込んだ。
だ。

私の手が携帯に伸び、震える指が通話ボタンを押した。
ただ、彼の声が聞きたかった。

The melody of the lifeline（創作五枚会テーマ

蛇足という指摘も頂きましたが、一応。

「私」が18歳にこだわっているのは、性同一性障害のホルモン注射などの身体的治療が18歳からしか日本では受けられないからです。

ちなみに、性同一性障害と同性愛を混同するのは間違いです。

性同一性障害について解説したエッセイ「変えられる体と、変えられない心＜性同一性障害＞」を書きましたので、興味のある方はそちらもお読み下さると幸いです。

春（創作五枚会テーマ「歓喜」）（前書き）

テーマ…歓喜

禁則事項…心理描写禁止

文字数…1979

春（創作五枚会テーマ「歓喜」）

立春も過ぎた、とある朝。

「うずうずして来た」

足自慢の春一番は、そう言うが早い走り始めた。

「みんな、起きろ！ ほら、起きろ！」

陽気な声を轟かせ、竜巻のような激しさで、春一番は駆け抜ける。欠伸あくびをしていた梅の精が、途中でそれを引っ込めて目をぱちくりさせ、その余波か一分咲きが三分咲きに。その足下では、何だ何だと寝ぼけた蛇が顔出す。桜の精は、穏やかな寝息を乱してぐずった。「そんなに乱暴にしないでちょうだい」

そう文句を言ったのは、椿の精。今が盛りと咲き誇る大輪の紅の花を黒髪に咲かせ、春一番の小僧を気怠けだるく睨む。

「だってよ、もうおいらい居ても立ってもいられないんだ。体中がうずうずして、むずむずして、わーって叫びたい気分なんだ」

春一番は走るのを止めず、椿の精の周りをくるくる回る。

「仕方ないわねえ。でも梅はともかく、桜はまだ目覚めるには少し早いわ」

眉をひそめる椿の精に、春一番は躍り上がって笑った。

「大丈夫！ 椿の姉さんと違って桜のやつは寝坊助だし！ 二度寝三度寝するんだから！ 今から起きる準備してやらなきゃ、気が付いたら夏で大慌てさ！」

陽気にいくつもとんぼ返りをしながら、春一番は去って行く。

それを微笑で見送った椿の精は、ぽとりと一つ、その腕から紅の花を白い雪の上に落とした。

「みんな、起きろ！ ほら、起きろ！」

「まだ寒いよ」

「まだ眠いよ」

春一番の声に、あっちこっちで小さな文句がさざめく。

けれども、そんな事はおかまい無しに春一番は雪を蹴り上げ、裸ん坊の枝を揺すぶって笑う。

「何言ってるんだい！ 雪が解けてからじゃあ、春に乗り遅れらあ！」

春一番が去った後、みんな寝ぼけながらも囁き合う。

「春？」

「春！」

「春だね」

「そうだ、春だね」

「準備を始めなきゃ」

雪の下で、種は芽吹く為に力を込めた。

うんうん唸りながら冷たい土を掻き分け、固い根雪を割って顔を出そうともがく。

木々は深呼吸して根から養分を吸い上げ、寝過ぎて強張った体を小さく揺する。

「急げ急げ。葉っぱがなくっちゃ、お日様の光を受け取れない」

木々の静かなざわめきに、倒木の影で集団越冬中のてんとう虫がちよろちよろと顔を出す。

けれども、どこかに隠れていた冬風がまた舞い戻って来た。冬將軍は春一番が追い立てて行ったけれど、下っ端はぐずぐずと意地が悪い。

「うわあ、寒いよ寒いよ」

「まだ早い」

「でも、体がうずうずする」

「今すぐ飛び出したいよ」

「焦れたいな、まだかな、まだかな」

再びの寒い風に引込んだ蛙が何度も寝返りを打ち、芽吹こうとした葉が枯れた色した枝の中で体をめいっぱい膨らませ、ほころびかけた蕾は息を詰めた。

「ああ、もう待ち切れないわ」

その寒さの中、そう叫んだ者がいた。

梅の精が紅と白の裳裾もすそを翻ひるがえして冬風を蹴散らし、膨らみきった蕾に次々と触れて行く。

紅い梅、白い梅、花開き、匂い立ち、侘しい冬枯れの野山に色を差す。

やがてさざめく笑い声のような春風が吹き始める。

お待たせ、お待たせ、と囁くように、木々を撫で、雪を解かし、梅の香を運び、雨を温ぬるませる。

「ああ、雨だ。温かい雨だよ」

「春の雨だ」

いつの間にか、冬風はいなくなっていた。

雪が消え、瞬く間に野に緑が萌え、つくしや蛇がによき顔を出す。

春の雨の口付けをまぶたに受けて、桜の精はふるとまつげを震わせた。

「起きや、起きや、そなたが起きねば倭やまとの春は始まらぬ」

「ホー、ケツキヨ、ケキヨ」

神社の齡重よわいねた大銀杏おおいちようが囃はやし立て、梅の枝の春告鳥が調子っぱずれの歌声を披露した。

「なんておかしな鳴き声なの」

夢現ゆめうつで桜の精がくすくす笑う。

「寝起きだもの、ちよつと調子が出ないだけさ」

春告鳥は言い訳して、盛んに歌の練習をする。

梅の枝から桜の枝へ。

また桜の枝から梅の枝へ。

「ホーホ、ケツキヨ、ホー、ケキヨ」

「ああ、おかしい」

笑いながら桜の精は目を覚ました。

腕をいっぱいに広げ、柔らかな日差しにあでやかに微笑む。

たおやかなその体の奥底から沸き上がる春が、蕾を一気に膨らませた。

「もっと、もっと！」

土の中の小さな小さな生き物達も、まだ寝ぼけている蛇も、ようやく這い出た蛙も、まだ顔を出していない芽も、生まれたての蝶々も、獣も、鳥も、みんなみんな、桜の精の喚び声を聞いた。

その渴望は伝播し、歌う者は歌い、踊る者は踊り、這う者は這い、伸びる者は精一杯背伸びした。

それら全てを飲み込んで、大地が静かに鳴動する。

押し寄せるそのうねりに、桜の精は忘我の笑みを浮かべた。その指先から目映い春が溢れ出し、一斉に蕾が花開く。

野山を、空を、全てを染める薄紅の花。

見よ、これがまほろばなる倭の春。

皆歌え、皆踊れ、これが歓喜の季節なれば。

口々に褒め讃えるのは名も無き古の神々の残滓。

幾度も絶える事無く繰り返される、神秘の終わり無き季節の連なり。

駆け抜けて行く一瞬の、この季節に、

「ああ、春よ！」

それ以外に、何を叫ぶことがあるだろうか。

春（創作五枚会テーマ「歓喜」）（後書き）

禁則事項、撃沈してるっぽい。

ハレルヤ！（創作五枚会テーマ「歓喜」その2）（前書き）

その2です。

一応代表は『春』で。こちらは完全に思いつきのマニアック路線。

ハレルヤ！（創作五枚会テーマ「歓喜」その2）

メサイアと聞いて、ハレルヤしか思い浮かばない人は多いだろう。クリスマス時期になると、ベートーベンの第九と並んでヘンデルのメサイアのコンサートも各地で開かれる。ちなみにメサイアは救世主、キリストの事だ。

メサイアは演奏時間が二時間半にも渡る、壮大なオラトリオだ。ヘンデルはこの長大な作品を、たった三週間で作曲した。まさに神が降りたと言えよう。

「オラトリオっていうのは、聖書の内容を人々に分かりやすく教えるたのぉ、宗教曲なんだぁね」

宗教曲オタクの指揮者カガチーが、楽譜を指揮棒でぺしぺし叩きながら皆を見回した。通常、こういうタイプのオタクは一般的に敬遠されるが、聖アンナ大学合唱団では事情が違った。皆恐ろしい程真剣な顔をしてカガチーの話に耳を傾ける。この話を聞くのは既に何度目か分からないのにも関わらずだ。

「当時としては画期的な、オペラの影響を受けた娯楽性に富んだ傑作であるからしてえ、宗教曲であっても情感豊かに歌わねばならないのだぁね」

カガチーは両手を振り上げ、神経質そうな顔に恍惚こうこつとした表情を浮かべた。それを見て引く人間はここにはいない。これが練習が始まったばかりの六月なら、あるいはその可能性もあつたかもしれない。しかし、今引くような者がいれば人非人ひとでなしという烙印らくいんを押されることになるだろう。

「俗なものを一切排したような天上の音楽、前期演奏会のバッハのモテットからは脱却し、民衆の血湧き肉躍おどるプリミティブな信仰心の再来を表現するのだぁね！」

力強く言い切る彼の解釈はおそらく一般的ではないのだが、誰も異を唱える者はいない。

聖アンナ大学合唱団は根っからの体育会系の部活だった。週三回の合同練習他、授業の空きコマを利用した各パートのリーダーと副リーダー達による団員への個別練、それに二回のオーディションが全員に課されている。暗譜あんぷは勿論もちろん、指揮者の指示まで頭に入っていない。合唱は体力だと筋トレの自主練が求められ、合宿でのマラソンや腹筋連続百回でへばると自主練をさぼったとして恐怖の罰ゲームが待っている。夏休み中のスキー場合宿なら、帰りはバスに乗らずに徒歩で三時間の道のりを大荷物背負って麓ふもとの駅まで下山、春休み中の海辺の合宿なら、二月の海で寒中水泳だ。男女関係なくこの罰ゲームは実施される。ちなみに、夏にスキー場、冬に海なのはオフシーズンで安いからだ。

メサイアの練習合宿は夏休み中に三回あり、最後の本合宿は十日間だった。一日の総練習時間は十時間近く、その他に筋トレにマラソン、英語の子音の発音特訓、時代背景や作曲者ヘンデルに関する勉強会が行われた。本合宿は五日目を過ぎると喉を潰す団員が続出し、体調不良で倒れる団員も出る。合宿後半のマネージャー部屋は保健室と化すのが常だ。しかし、それを乗り越えたと最終日の合同練習には合宿前とは比べ物にならない上達ぶりをみせるのだ。メサイアの分厚い楽譜は細かい指示に埋め尽くされ、手垢てあかに塗まみれ、一時間以上立ちっぱなしで舞台上で歌えるだけの体力がつく。二十曲もある合唱曲の暗譜も、ほぼ出来ていた。

しかし、それらは必要最低条件。そこからが、如何いかに指揮者の意図する世界観を聴衆に伝えるかという、一つの芸術作品に仕上げる戦いだ。伝わらない言葉に意味は無いと何度も同じところを繰り返して歌わされ、息継ぎの仕方一つで歌の流れを止めると怒鳴られ、ピアニッシモに緊張感が足りないついでと罵倒され、そんなフニャチンなフォルテがあるかと嘲笑あざわらされ、誰もが一度は影で涙する。それでも、合宿を乗り越えた団員達に脱落する者は殆どほとんどいない。

「君達にはあゝ、もう、それが歌えるはずなのだね。後は悔いの

無い様に歌うだけなのだね」

カガチーは団員みんなを見回して最後にそう締めくくり、譜面台の上の楽譜を閉じた。

そして、恒例の儀式をやるべく各パートリーダー達が前に進み出る。本番直前に、楽屋で必ずやる気合い入れた。

「フレーツ！ フレーツ！ 歌魂ッ！！」

「歌魂ファイト！ オーツ！！」

動作を添えての応援団風のパートリーダー達の掛け声の後に、団員全員で鬨ときの声を上げる。

もう、今この場に居るのは半年に渡る修羅場をくぐり抜けて来た戦友であり、指揮者はいわば命を預けた將軍だ。カガチーがカラスは白いと言え、団員達はそれを是とする程に全てを委ね、一丸となって舞台に臨むのだ。

舞台袖で手足が震えるのは、武者震い。目が眩むような明るい舞台に肅々として進み、整列する。

カガチーが拍手する聴衆に一礼して、指揮台に上がる。その指揮棒がすっと上がると、会場のざわめきが鎮まり、団員達の背筋がぴしりと伸びた。

食らい付くような気魄きはくの籠った団員達の眼差しがその指揮棒に集まる。

その痛い程の視線の集中に、カガチーがニヤリと笑った。

そして、カガチーの深呼吸にシンクロする団員達の深呼吸。

高まった緊張の頂点にすくと指揮棒が振り下ろされ、同時にオーケストラの前奏が始まる。カガチーの、“ヘンデルのメサイア”の世界の開幕だ。

いざ歌え、歌魂！

下腹に響く力強い単旋律、波の様にうねり重なるキラキラと輝く複旋律、空気を震わす重厚な和音、腹筋が痙攣しそうな細かい音の

刻みも全て体に叩き込まれている。後はその楽器を響かせるだけなのだ。

声を合わせ、心を合わせ、聴衆をも巻き込んで、足下から這い上がる最高のエクスタシーを共有する一瞬の為に。

ティンパニーロールの怒濤どたうの勢いに乗り、高らかなトランペットと共に飛翔し、その先にある一瞬に、歓喜の言葉ことばを胸に轟とどろかせるのだ。

ハレルヤ！

ハレルヤ！（創作五枚会テーマ「歓喜」その2）（後書き）

八割実話。

ヘンデルのメサイアは三部構成でハレルヤは第二部のラストの為、
本当のラストはアーメンコーラス。

実はハレルヤよりもアーメンコーラスが好きな私。
ぞっくぞっくします。

風（創作五枚会テーマ「光景」）（前書き）

テーマ…「光景」

禁則事項…固有名詞の使用禁止 直喩法禁止

文字数…2358

風（創作五枚会テーマ「光景」）

俺のこと嫌いかって聞くと、いつも答えは「そうかもね」だった。違う答えだった事は、一度きり。

それはあまりに突然で、動転した俺は強引に別の話題に逃げた。情けねえの。

「はあ、マジかよ……」

目を開けた時、自分が泣いていることに気付いて軽く落ち込んだ。涙なんてずっと忘れてたのに。

夢の中で、アイツは微笑んでた。実際のアイツは、俺に微笑んでくれたことなんかなかったけどな。何時も硬い表情で、時折浮かべる笑みは皮肉げで。

あの一度きりの答えも、きっとほんの気紛れだったんだろう。

「おはようございます」

突然掛けられた声に、一瞬ぼんやりする。

「んあ」

目をこする振りをして涙を拭うと、ソファから降りた。

そうだ。昨日六年ぶりに偶然、こいつと再会したんだっけ。酒飲んで、酔っぱらって、こいつんちに勢いで転がり込んだんだった。

「僕はあと三十分くらいで出ますけど、先輩は？」

あの頃と変わらない口調で、あの頃と違うスーツ姿で、可愛くない後輩は素っ気なく聞いた。

「俺も一緒に出るよ」

外へ出ると空は昨日にも増して鮮やかに青く、ギラギラした日差

しにうんざりした。

「んー、今日も良い天気だなあ」

「良い天気が続き過ぎるのも考えものですけどね」

天気に対応しくない隣の陰気な台詞に、俺は顔をしかめる。

「なんだ、その後ろ向きな発言は」

「日照りに近いんだから後ろ向きにもなります。今日も一時断水になるらしいですよ」

こいつは昔からこの調子だ。若年寄め。

「大丈夫だろ」

「なんなんですか、その自信の根拠は」

「俺が大丈夫と言ったら大丈夫だ」

「先輩、あなた何様です？」

「俺様」

呆れる後輩に、俺は笑って深呼吸した。

「んー、やっぱり雨の匂いがする」

隣で驚く気配がして、俺は思わずにんまりした。

「懐かしいだろ？ 色はまだ見えて来ねーけど、匂いは分かるようになって来た」

アイツはちょっと変わってて、風の匂いや色の変化が分かるとか言うヤツだった。俺も、部活の皆も、最初は冗談だと笑ってたが、アイツの気象予報は驚く程ぴたりと当たった。そして雨が降る前は決まって「雨の匂いがする」と言った。天文部には、なかなか便利なヤツだった。

「いつから分かるようになったんですか？」

「んー、どうだったかな。忘れた」

アイツがいなくなってから、アイツのことを考えない日は無かった。

勿論、一日中考えてるわけじゃない。アイツ無しでも、世界は相変わらずそこそこ楽しかったし、やりたい事も、夢もあった。

ただ、微かな風も全くない日は無かったし、風は何時でもアイツ

を思い出させた。そしたら、いつの間にか風の匂い分かるようになった。的中率はアイツと比べたら格段に低いので、思い込みの可能性も否定出来ないが。でも、いつか風の色も見えるようになるかも知れない、なんて俺は思っている。

「辛くないですか？」

「ん？ 何があ？」

「いえ……」

こいつの言いたいことは、分かっている。分かっているトボケたのも、こいつにだって分かっているだろう。

あの事故で俺は片想いの相手を失い、こいつは姉貴を失った。

「バーカ。片想いの醍醐味だいごみを知らねーのか？」

「僕はそういう浮いた感情とは縁が薄いので」

完璧に澄ました顔で答える横顔に、俺はにやりとしてしまう。

こいつもそれなりに成長してるんだな、なんて偉そうなことを思う。

あの頃はアイツの事に話が及ぶと、いつも痛そうな顔をしてたのに。

「そりゃ気の毒に。恋の一つも無しじゃ人生味気ないだろ」

「放つといて下さい」

「不毛だねえ」

「先輩には言われたくないですね」

そりゃそうだと苦笑する。

そうこうしているうちに、駅に着いた。

「んじゃまたな」

「ええ、お元気で」

ふと。

背を向けかけて俺は動きを止めた。

脳裏に、突然あの日の光景が蘇る。

コマ送りで次々と浮かぶ映像。

わずかに西の空に赤みを残した夕闇。

星を待つ校庭で、アイツは膝を抱えて座っていた。
恒例の質問をした俺に、アイツが俯き加減で答えた。
夕闇で、アイツの表情は見えない。

次の瞬間、アイツの肩がアップになった。

その肩が微かに震えている様が、鮮明に脳裏に映し出される。

ああ、俺は馬鹿だ。

大馬鹿だ。

否定の答えを聞きたくなくて、好きかと聞けずに嫌いかと聞いていた。

アイツは、勇気を振り絞って、あの答えを言ってくれたんだ。
今頃気付くなんて、鈍感にも程がある。

遠ざかる最後の映像の中で、風に吹かれて乱れた髪がアイツの震える肩を優しく抱いていた。

俺が、抱いてやれば良かった。

「おい」

気が付くと、俺はアイツの弟を呼び止めていた。

「何です？」

「一つ訂正。俺、片思いじゃねーんだ」

俺は笑っていなかった。多分、酷く真剣な顔をしていたと思う。

「嫌いじゃないって言ってくれたの、思い出した」

「……また微妙な」

その言葉の通りの微妙な表情に、俺は苦笑した。

「微妙じゃねえよ。あのひねくれ者が言ってくれたんだぜ？」

俺がそう言くと、アイツの弟は少し俯いた。

それから、ぼそりと呟いた。

「知ってました」

「んあ？」

「知ってました、姉さんが先輩を好きなこと」

顔を上げて、真っ直ぐに俺を見て言ったその目が、アイツの目に
ぴったり重なった。

不覚にも、目頭が熱くなった。

時々、血の繋がりってヤツにはマジで打ちのめされる。
居たたまれなさに、俺は体をくねらせておどけた。

「そおかり、両想いとか、うわぁ、照れるねえ」

「……もう行っても良いですか？」

疲れた溜め息と共に向けられた背に、俺は声を掛ける。

「おう、お前も幸せになれよ！」

「余計なお世話です！」

怒鳴り声に笑い返して、俺も歩き出す。

熱いビル風が俺に体当たりしてきたが、やっぱり雨の匂いがする
気がした。

もう少し、もう少しだけアイツに恋したままでいよう。

せっかく、両想いになれたんだから。

「くそ、目から鼻水が出るじゃねえか」

そう呟いて見上げた眩い空を、夢で見たアイツの微笑みが吹き抜
けていった。

風（創作五枚会テーマ「光景」）（後書き）

もう文字数オーバーは気にしない（涙）。
これ以上削れないんだもんっ

夢の砂漠（創作五枚会テーマ「砂漠」）（前書き）

テーマ…「砂漠」

禁則事項…擬態法禁止 擬人法禁止

夢の砂漠（創作五枚会テーマ「砂漠」）

銀の月に照らされた広大な青白い砂漠を見渡し、少女は一つ溜め息を吐いた。

「月が無かったら、ここが地球だなんて忘れてしまえそう」
青く輝く命の星、地球。

そんなお仕着せの言葉とはかけ離れた世界は酷く心地良くて、少女は苦もなく歩を進める。砂にめり込む足の不安定な感覚すら、雲の上を歩くようで楽しい。

少女は、なぜ自分が砂漠にいるのか知らない。
いや、なぜと疑問にすら思わなかった。
そこは、“そういう世界”だから。

砂山を登りきったところで、少女は銀色に輝く物体を見付けた。初めて見付けた“何か”に砂に足を取られながらも急いで駆け下りる。しかし近付くにつれてその輝きは深い陰影を露にし、それが少女の歩みを次第に鈍らせ、ついには立ち止まらせてしまった。下半分が砂に埋もれた飛行艇は絶えた文明の墓標のようで、それでいてたった今不時着したかのような鮮やかさで少女を圧倒する。

少女は一步後退り、辺りを見回した。しかし、どこにも飛行士の姿は見当たらない。

「残念だなあ。彼がいたら、私は星の王女さまよって自己紹介したのに」

少女は心の翳りを振り払うように、少し大きめの声で独り言を言った。お気に入りのあの本では、不時着した砂漠で飛行士が星から来た小さな王子さまと出会うのだ。

「彼はここにはいないよ。だって、彼は探し物を見付けたからね」

振り返ればいつの間にかそこには風変わりな少年がいて、微笑みながら少女を見ている。少年は金髪碧眼の典型的な白人の容貌をしていながら、アラブ人のような格好して、日本語を話した。

「あなたは、誰？」

「僕は“嘘つき”だよ、“星の王女さま”」

独り言を聞かれていたかと思うと、少女は恥ずかしくて不貞腐れた顔をした。

「“嘘つき”さんは、ここがどこだか知ってるの？」

しかし、恥ずかしさにまさる好奇心で少女は少年に問いかける。

少女はここが“そういう世界”だと知っていたので、少年がどう答えるか知りたかったのだ。

「知っているよ。君にとってはサハラ砂漠だろ？」

「私にとっては何？」

「そう。僕にとってはタクラマカン砂漠」

「それじゃあ、ここがどこか知らないのと一緒じゃない」

「そうかな？」

少年は、笑みを浮かべたまま左手を宙に差し伸べた。彼の手の上には月が乗せられている。それを右手で少女の目から隠し、手品のように次の瞬間月を別のものに変えて見せた。少女は目を丸くして、少年の手の上にあるものを凝視する。

「これ、何だ？」

「何って、林檎でしょ？」

「林檎ってどんなもの？」

「え……丸くて、赤くて、中が白い果物？」

少年は腰に下げたナイフで手の上のそれを二つに切った。白い断面の片割れを、少年は少女に投げる。

少女が両手で受け取ったそれは、スポンジのように柔らかく、乾

いていて簡単に形が変形した。そして、冷たくもないのに手の上で溶けて蒸発し、跡形も無く消え失せた。

「“真実” っていうのは、そういうものだよ。“真実” の何かなんて、到底言葉で説明し尽くせないもので、どこにも存在しないんだ」
何でも知っているような顔をする少年に、少女は腹立たしくなつて眉間に皺を寄せた。

「それじゃあ、あなたはここが“真実の砂漠” だっていうの？」

「そうだよ。この砂漠は全ての砂漠であり、そしてどこにもない砂漠なんだ」

「でも、確かなことはいくらもあるわ。月があるんだから、ここは地球のどこかの砂漠なの」

「月なんかどこにも無いよ」

つい今しがた手の中で消えた月だったものを思い出し、少女は悔し気に唇を噛む。

「砂漠は、砂の世界よ」

「確かめてみたら？」

少女はしゃがんで砂を手にくくってみた。それはガラスの様に透明で、水のように滑らかで、虹色の淡い光を放ちながら少女の手から零れ落ちた。

「砂漠は、静かだわ」

「砂嵐の時はどうかな？」

「砂漠は、砂漠は……」

言葉に詰まってしまった少女は、自分がどうしようもない馬鹿に思えて泣きたくなった。

「ごめんよ、別に君を泣かせたいわけじゃないんだ。でも、君だつて分かっているはずだよ。だって、君はここに来れたんだから」

そうだった、ここは“そういう世界” なのだ。そう少女は気を取り直し、少年を見た。

「でも、ここがあなたの言うように“真実の砂漠” だとして、それにどんな意味があるの？」

「それは、僕は君じゃないから分からない。でも、君が会いたかった彼は探し物を見付けて旅立ったよ」

少女が反射的に振り返ると、あの飛行艇はいつの間にか消えていた。

「大切なものは、目に見えない」？」

「そう。それだけ聞くとなんて薄っぺらいと思うだろうね。けれども、それこそそれを見付けるために彼が辿った、目に見えない“真実の砂漠”での旅の過程そのものが、大切なんだ」

「そうね、今の私が“大切なものは、目に見えない”って言ったって、砂一粒の重さも無いわ」

「そうかな？ 砂一粒が星一つと同じくらい重いかもしれないよ？」

少年が笑ってその白い手を夜空に一振りすると、宇宙を背景に巨大な金色の天秤が浮かび上がった。

「乗ってみる？」

「からかわないでよ」

少女には、そんな勇氣はなかった。

肩を竦めた少年が白い手をもう一振りすると、それは幾千の流星になって二人の上に降り注いだ。その最後の一つが消えるのを見届けて、少女は少年に尋ねる。

「ねえ、あなたは何を探しているの？」

「僕は、真実を見付けたつもりだった。だけど、持ち帰った僕の真実を誰もが嘘だと言ったので、尻尾を巻いて逃げて来たのさ。臆病者と、君は笑うかい？」

少年が常に浮かべていた笑みがその顔から消え、少女は両親の“正論”に反発しながらも反論出来ない自分を思い出した。

「見て。どこまでも続く砂の大地だよ」

両腕を広げた少年の向こうに、少女は広大な砂漠を見詰める。

「この中の砂の一粒に“真実”が詰まっているとして、それを探し出すのは不可能だと思うかい？」

「いいえ、きっと見付かるわ。彼が王子さまと砂漠で井戸を見付け

たみたいに、奇跡は起るの。それが一分後なのか、一億年後なのかは分からないけれど」

「君は一億年も生きるつもりなのかい？」

「現実世界の時間の概念を、“真実の砂漠”で語っても意味は無いんじゃないの？」

「一本取られた」

少年の顔に笑みが戻り、少女も初めて少年に微笑んだ。

不意に少女の体が透け始める。その体を見下ろして、少女は残念そうに溜め息を吐いた。

「ねえ、またここに来れるかしら？」

そう言う間にも、輪郭を保つことすら難しくなっていく。

「君が望めば、何時だって“真実の砂漠”はそこにあるよ」
そして最後に、少年の囁きがこだました。

夢の砂漠（創作五枚会テーマ「砂漠」）（後書き）

作中に出て来る本は、アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ著
の「星の王子さま」です。

連理の枝（創作五枚会テーマ「幸福」）

久枝は預金通帳を眺めながら、溜め息を吐いた。

夫の則夫が三年に五十八でリストラされてから、久枝がパートの収入でなんとか家計を支えている。だが、年金支給まではまだ間があるし、元々乏しい蓄えは減るばかりだ。子供達は独立しているが、それぞれ家庭があつて頼るのは気が引ける。家のローンがないからまだましだが、義父が遺してくれた築五十五年の家はあちこちガタが来ているし、段差の多い古い作りはこれから老いてゆく二人には危険だった。しかし、リフォームなどする余裕があるはずもない。

本当ならもっと蓄えがあつて良いはずだった。子供二人には確かに金は掛かったが私立に通わせたわけでもなし、贅沢をしたわけでもない。しかし、久枝の夫は馬鹿が付くようなお人好しだった。お金に困った親戚や知人に頼まれると、借用書も書かずにお金を貸してしまう。連帯保証人になることはしなかったので借金を負わされる事は免れていたが、貸した金が戻って来たことは無かった。

眺めていたって増えるわけでもなしと、久枝はもう一つ溜め息を吐いてから通帳を閉じた。

久枝は古風な女で、夫のすることに文句を言った事はなかった。もともと則夫の優しい性格に惹かれて結婚したこともあり、若い内はそれ程夫のお人好しを苦々しく思う事は無かった。しかし、子供が大きくなってお金が掛かるようになるにつれ、老後のことを心配する年齢になるにつれ、夫に対する不満は澱^{おり}のように積み重なっていった。それが一年程前に爆発したのだ。経営していた会社が倒産して夜逃げするという友人に、少ない蓄えから百万も渡したからだ。『お人好しもいい加減にして！ 貸したお金が返って来た事なんか無いじゃないの！ 他人の事より、自分や私のことを考えてちょうだい！』

結婚して三十七年、初めて夫を罵り、怒りに任せて泣きわめいた。

驚きに顔を強張らせ、悲しい目をした夫の表情が今も久枝の胸に抜けない刺となつて残っている。あれ以来、夫婦の仲もぎくしゃくしてしまっていた。その上、短期の仕事をたまにするくらいでずっと夫が家にいるということも久枝の苛々に拍車を掛けている。もちろん、久枝とて則夫の年では再就職が難しいことは、承知していた。パートに出る久枝に代わって家事もやってくれる。

「お父さんが悪いわけじゃない……」

立ち仕事で疲れ、痛む膝を擦りながら久枝は呟く。呟きながら、涙を滲ませた。娘の藍子に初めての子供が出来たというのに、今のままでは満足にお祝いもしてやれない。それどころか、数年先の生活さえ危うい。なぜ、こんなに惨めな思いをしなければならないのか。そう思うとどうしても夫に対する憎しみが沸いてしまうのを止められなかったが、それを断ち切るように不意に玄関チャイムが鳴った。久枝ははっとして顔を上げ、慌てて目元を拭い、立ち上がった。

「久枝、ちょっと来てくれ」

来客が帰ると、則夫は久枝を居間に呼んだ。机の上には分厚く膨らんだ封筒が置いてある。久枝はいぶかしく思いながらも、則夫の向かいに座った。

すると、突然則夫は座布団を外して畳に直接正座し、深々と久枝に向かって頭を下げた。

「久枝、今まで俺の我が侘にずっと付き合ってくれて、本当にありがとう。お前のお陰で、俺はお人好しでいられたんだ。苦勞を掛けて、本当にすまなかった。俺はお前に甘えて、お前が辛い思いをしているなんて、怒鳴られるまで気付きもしなかった。お前にあんな顔させるなんて、俺は大馬鹿だった」

則夫は、観音様のように穏やかな微笑みを浮かべる久枝に惚れて結婚した。いつも黙って則夫のしたいようにさせてくれたので、久

枝も自分と同じ思いでいてくれると思っていたのだ。怒鳴られて、久枝の鬼のような顔を見て初めて、則夫はもう随分前から久枝があの微笑みを浮かべていない事に気付いた。自分の我が侘で、あんなに優しい女だった久枝から微笑みを奪ったのだ。あの時はショックで謝ることも出来なかった。そして日が経てば経つ程、則夫は謝る事が出来ないでいた。けれども、今日、その勇気を貰えたのだ。

突然の事に驚いて言葉も無い久枝に、則夫は涙ぐみながら事の次第を話した。先ほどの来客はかれこれ二十年前に貸した百万円を、気持ちの十万円を上乗せして返しに来てくれたのだ。長い間、本当に有り難うございましたと涙ながらに礼を言って帰っていった。

「これっぽっちの金じゃ、お前を安心させてやる事なんて出来やしないだろう。でもなあ、俺はこの世の中にこんな嬉しい事があるなんて、思いもしなかった。お前の言う通り、貸した金はもう返って来ないと俺も諦めていたよ。だからかなあ、本当に、本当に嬉しくて……。ありがとう、久枝。全部、お前のお陰だよ。これは、お前のものだ」

借りた金を返すのは当たり前だ。それにたった一度、これが最後かもしれない。それでも則夫は嬉しくて涙が止まらなかった。そして、自分を支えてくれた久枝に、改めて感謝した。

久枝も、差し出された分厚い封筒を前にして泣いていた。夫の心からの言葉に、長年積もり積もったものが奇麗に浄化されていくようだった。そして、返しに来てくれた律儀な人にも頭を下げたい気持ちだった。忘れていた夫への敬慕と感謝の気持ちしがひたひたと静かに身の内に戻って来るのを感じ、久枝は老いてやつれた顔に久しぶりの笑顔を咲かせた。

「もう、良いわ。私も嬉しい。二十年も前の、証文も無い借金を返しに来てくれるなんて、奇跡みたいなものだもの。こんな経験、そうそう出来るもんじゃないでしょう」

これからも生活は楽にはならないだろう。それでも、この出来事を思い出せば元気に生きて行ける気がした。

久枝は膨らんだ封筒を神棚に供えた。

「奇跡だものねえ、神様に感謝しましょうよ」

「そうだな」

二人は神棚の前に並んで立ち、柏手を打って頭を下げた。

それから、照れくさそうにしながら則夫は久しぶりに妻の手を握った。久枝もその手をそっと握り返したが、この一言は忘れなかった。

「でも、もう貸すのはやめて下さいね？」

すっかり観音様の微笑みを取り戻した久枝に釘を刺され、則夫は何とも言えない顔をして苦笑した。

連理の枝（創作五枚会テーマ「幸福」）（後書き）

五枚会、これで最後の作品です。

主催してくださったダンテ様、有り難うございました、そしてお疲れさまでした！

参加者の皆様、感想を下さった皆様、ここまでお付き合い下さり、本当に感謝です。

幸福ってなんだろう？

最後の最後でとても難しいテーマでした。

手抜き禁止が守れているか分からないですが（汗）

難しかった＞＜

でも、勉強になりました。

ありがとうございました！

そうじさんの「光景」をパロってみた。(前書き)

五枚会参加者のそうじたかひろさんの「光景」をパロってみた作品。
勿論ご本人の了解は取ってあるお遊び企画でございます。

そうじさんの「光景」はこちら <http://ncode.syosetu.com/n53540/9/>

そうじさんの「光景」をパロってみた。

「死後二、三週間だって？」

無機質な色の控え室に響く自分の声が、テレビドラマの下手な芝居を脈絡も無く思い出させた。胸にのしかかる息苦しきだけが俺を現実にかろうじて繋ぎ止めている。

意味不明な単語の羅列を、脳が理解する事を拒否してる。しかし、拒否している現象そのものも、現実味が無い。死後二、三週間。それにどんな意味があっただろうか。

「よ、よくわからないんだけど、どうやらシャワーを浴びていて足を滑らせたみたいなの。打ち所が悪かったみたいで、それで……」

母は途中で言葉を途切れさせたまま押し黙った。古ぼけた黒の待合ソファに座った両親は、その陰気な闇に沈みこんでいる。

「とにかく、ここで待ってって言われたのよ」

母の口から絞り出された言葉に、一瞬呼吸が止まった。

何を、待つというのか。

ああ、いつだって納得するよりも先に現実はやってくるのだ。

気が付けばドアノブに手を掛けていた。自分の意志でない何かに追い立てられ、灰色に沈んだ部屋を飛び出す。薄い木製の扉が背後で閉まり、その乾いた音は冷たいリノリウムの廊下を逃げる俺を、嘲笑いながら追いかけて来た。

警察の正面玄関脇には、隠れるように設置された粗末な作りの灰皿があった。肺の奥底まで吸い込んだ紫煙を溜息混じりに一気に吐き出す。煙はしばらく宙を彷徨い、やがて灰色の空に溶け込んでいった。胸の重苦しさが、なぜ吐き出した煙と一緒に溶けてなくなっていくのか不思議だった。いつも通りに、喫煙の快感は肺に満足感を与えるのに。

「どうだった？」

不意に耳に入った声に機械的にそちらを振り向くと、白衣を着た背の高い男が、同じく白衣のひげを生やした男に話しかけていた。すぐそばには、黒塗りの寝台車が停まっている。

「お湯浴びっぱなしだったみたいだな。全身ぶよぶよにふやけて肉が一部そげ落ちてた。酷い悪臭もあるし」

「薄々そうかとは思っていたけどやっぱりか。じゃあ袋を用意してくる」

「ああ。俺はちょっと家族と話してくる」

彼らの話している話題が何か、客観的な情報を繋ぎ合わせれば理解出来る。ただ、意味のある情報にならないのだ。分解され、記号化され、数値化された情報は、血肉を持たない。俺はもう一度煙草の煙を深く吸い込んだ。そして、ゆっくりと吐き出す。もやもやと広がる白い煙に、ふっと妹の面影が浮かんだ。

ダメだ。

俺は固く目を閉じてぐっど呼吸を止めた。

しかし、いくら呼吸を止めたとしても、時が止まるわけではない。この息苦しさから、逃れられるわけもない。俺は、俺を嘲笑ったあの扉の閉まる音を聞いた。

逃亡に、何の意味があるのか。

俺は灰皿に煙草を捻り潰し、蛍光灯の光を薄闇色に反射する冷たいリノリウムの廊下に足を踏み出した。

白衣の男の説明は、やはり単語の羅列だった。

それでも、それらは自動的に情報処理されて無機質な問題をあぶり出す。火葬場の予定の関係で、すぐにも火葬しなければ次に火葬が出来るのは明明後日になる。どうするかすぐに決断しろと迫られ、母は声をなくしていた。

「その人の言うようにした方がいいんじゃない？ それとも三日後にする？」

俺の声は、こんな声だったろうか。機械の自動音声とどこがちがうのだろうか？

遺体の状態が酷い事は分かっていた。それが、合理的であることは明白だ。母は突然の俺の発言に驚き、強張った表情でこちらを見たがそれも数秒。次の瞬間には両肩を大きく落とし、深く、とても深く息を吐いた。

「そうよね。あんな姿で何日もいる方がつらいわね。わかったわ。あなたも最後に会ってやって。私達はもう会ったから」

俺は機械的に頷き、白衣の男と再び控え室を出た。

あの扉は今度は嗤わなかったが、靴音が鈍く反響する廊下は重くのしかかる澱んだ空気で満たされていた。呼吸一つするのも、億劫だ。一步毎に胸の上に見えない岩が積まれてゆく。

「今は、どんな状態なのですか？」

「台の上に、何も着ていない状態で安置されています。二週間以上お風呂場にいたそうで臭いも相当あります。誠に申し上げにくいのですが、お体はかなり膨張しており、残念ながら知ってらっしゃる

姿とはかなり違うかもしれませんが。個人的な意見ですが、ご家族の方ならばこそあえて見ないほうが良いかもしれません」

何も着ていない――

臭いが相当ある――

膨張している――

バラバラになった情報が頭の中をぐるぐる回る。

見ないほうが、良い？

何も着ていない――

臭いが相当ある――

膨張している――

無意味に繰り返される情報のテロップを眺めながら、別のところで妹の姿が浮かぶ。

つい最近の大人びた化粧をした妹、俺が昔泣かした小さな妹、何時だったか何となく想像していた花嫁姿の妹。

妹を、見ないほうが良いなんてことがあるのだろうか？

「こちらです」

目の前にそびえるのは、鈍く仄光る鉄製のドア。

次第に遠ざかっていく周囲の音と入れ替わりに、自分の鼓動と呼吸ばかりが迫って来る。

この扉の向こうにあるのは、醜悪な物体だ。

この扉の向こうにいるのは、哀れな姿になった妹だ。

引き返せと警鐘が鳴る。

逃げ道は、ある。言い訳なら、いくらでも出る。

「ではお入りください」

ああ、いつだって納得するよりも先に現実はやってくるのだ。

立ち竦む俺の前で、低い悲鳴を上げながら鋼鉄の扉が開いた。
俺の瞼は閉じることを忘れて凍り付いている。

そして、俺は開かれた扉の向こうの“それ”を見た。

壱太郎さんの「無癖」をスピンオフ（前書き）

五枚会便乗参加者の壱太郎さんの第二回作品「無癖」からスピンオフ作品を書かせて頂いたお遊び企画。

壱太郎さんの「無癖」はこちら <http://ncode.syosetu.com/n8535o/2/>

壱太郎さんの「無癖」をスピンオフ

私は、美人じゃない。

酷いブスではないと思うけれど、それだけだ。

唯一の自慢といえるのは、髪くらい。椿油でもつけたように艶やかで豊かな漆黒を、祖母はいつも褒めてくれた。

一般的には重くて陰鬱な長い黒髪。それでも、これが唯一自分のもっている美しい部分だと思う。普段は邪魔にならないように髪を纏め上げているけれど、鏡の前で髪を下ろして丁寧に、丁寧に、櫛を入れるのが私はとても好きだった。

だから、美しさに決して無関心なわけではないのだけれど。化粧や服装を変えたところで自分が惨めになるだけだと、積極的にそういう冒険をしたことはない。

だいたい、男に媚びる化粧も服装も、私は嫌いだった。

女性向け雑誌は“愛されメイク”だの“モテ服”だの、男に愛されるためのハウツーに溢れている。まるで男に愛されなかったら価値がないみたいな軽薄な言葉が、私は大嫌いだった。コンタクトに変えた方が可愛いのに。何時だったか誰かに言われたせいで、私は一生コンタクトなんかにするもんかと思った。今もお洒落なんかとは無縁の、機能だけ果たす眼鏡を掛けている。私は、男になんか愛されることでしか価値を見出せないような安い女にはなりたくない。

そう、思っていた。

彼に出会うまでは。

最初は、質の悪い冗談だと思った。

学内でも彼はちょっとした有名人だった。いわゆるイケメンで、男女問わず友達が多くて、私のような人間からすれば住む世界が違うタイプ。同じ学部だったけれど、きっと一言も言葉を交わさない

まま卒業するだろうと思っていた。

モテるのも、彼女がしょっちゅう変わるのも有名だったから、余計に信じられなかった。交際を申し込まれても、正直何かの罰ゲームとは思えなかった。

でも、彼は言ったのだ。

私の髪が好きだと。

生まれて初めて出来た恋人は、私を溺れさせた。想像できるどんな素敵な男性よりも彼は優しく、話が上手くて、そして誠実だった。

何より私を有頂天にさせたのは、彼が私を堂々と恋人として友人に紹介し、私をどこにでも連れて歩いてくれた事だ。他人から羨ましがられる立場がこんなにも心をくすぐるなんて、想像だにしたことがなかった。

同時に、不安にもなった。彼のまわりには雑誌に出て来るような女が沢山いたし、男達は私を見てあからさまに意外そうな顔をした。でも、不安に駆られたからって、私はあの女達のように化粧を研究したり流行の服を着たりはしなかったし、コンタクトに変えたりはしなかった。そんなふうに媚びを売らなくても、彼は私を変わらず愛してくれる。それを証明するように、彼は心変わりもせず、私を大事にしてくれた。

ミスキャンパスとかいう王冠がご自慢の女が、私に長く彼と付き合い続けるためのコツを聞いて来たとき、私の中に吹き荒れた勝利の喜びは今思い出しても震えがくる。私は用心深く内心を隠し、地味女に相応しい控え目な一言を返した。

いまでも、不安なの。

ええ、それは本心。でも、その不安を彼が覆してくれるのが快感

なの。

愛されている。

私は、誰もが羨む素晴らしい男に愛されている。

男に愛されていない女に価値がないと、そう納得してしまう程に私は幸せだった。

私は鏡の前で髪を梳くしけずる。

鏡の中の私は、彼と付き合い始めたころに比べると随分と痩せた。最近すっかり食欲が落ち、髪の艶も悪くなった気がして昨日も美容院で評判の栄養パックをしてきた。そのお陰か櫛の通りも良く、光沢を放つ黒髪の美しさに私はほれぼれしてしまう。ついつい一時間でも二時間でも髪を梳かし続けてしまい、ふと時計を見れば既に彼との待ち合わせの時間が近い。

私はもっと梳いていたいのを我慢して櫛を置き、髪を纏めようと手で束ねたところで、ふと手を止めた。露になった私の首に残された印に、目が離せなくなったから。その印を鏡の中に見詰めながら私はそっと指でなぞってみる。私はえも言われぬ震えが体の奥底から沸き上がるのを感じて、湿っぽい吐息を吐いた。

ああ、私は美しいのだ。

恐怖と快楽が近いものだと、彼と愛し合う様になって私は初めて知った。彼の男らしい節くれ立った指が、私の髪留めを外してその指で乱す。その瞬間から、私はこの世で一番美しい女になる。

私が乱れれば乱れる程、彼は悦んだ。美しい彼が私を恍惚の眼差しで見詰め、私の首に手を掛ける。彼を深く受け入れる肉の悦びと、首を這う彼の指が齎す戦慄が私の鼓動を跳ね上げる。消える前に刻まれる首の痣は、彼の指の形を次第に濃くしてゆく。それはあたかも彼の私に対する愛の深まりを示しているようだ。

恍惚とした美しい女が鏡の中で笑う。

私を殺してしまう程、彼の愛が深まるのはもうすぐだ。もしかしたら、今夜かもしれない。そう思うだけで、体の芯がじくじくと潤ってくる。

私は、目を閉じて深呼吸をした。そして手早く髪を纏め上げ、最近手放せなくなったスカーフを首に巻く。これは、誰にも知られたくない彼と長く付き合うコツなのだ。知られたところで、彼の愛を理解出来る女は私以外にいないに違いない。だって、彼と付き合った女はみんな短時間で別れている。

ああ、なんという優越感だろう。

支度を整えた私は、最後に愛を永遠にする為の小道具を鞆に忍ばせた。

殺してしまう程彼に愛された女は、私だけでいい。

殺されても構わない程に彼を愛した女も、私だけでいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8269o/>

短編集

2011年3月20日14時40分発行